

第 1 章

福岡市の歴史文化の特徴

本章では、市民と行政の連携による文化財の保存・活用の根幹として本市固有の歴史文化が共有されるように、本市の自然、社会、歴史環境や市内に所在する文化財を踏まえ、歴史文化の特徴を整理します。

1-1 自然、社会、歴史

(1) 自然環境

1) 位置

福岡県の北西部に位置し、^{げんかいなだ}玄界灘、東シナ海を挟んで、朝鮮半島やアジア大陸と近接しています。大韓民国の^{プサン}釜山広域市とは直線距離で約210kmに過ぎず、本市から広島市まで(約215km)よりも近い距離にあります。この地理的な条件は、本市が大陸との交流拠点として独自の歴史文化を形成する大きな要因といえます。

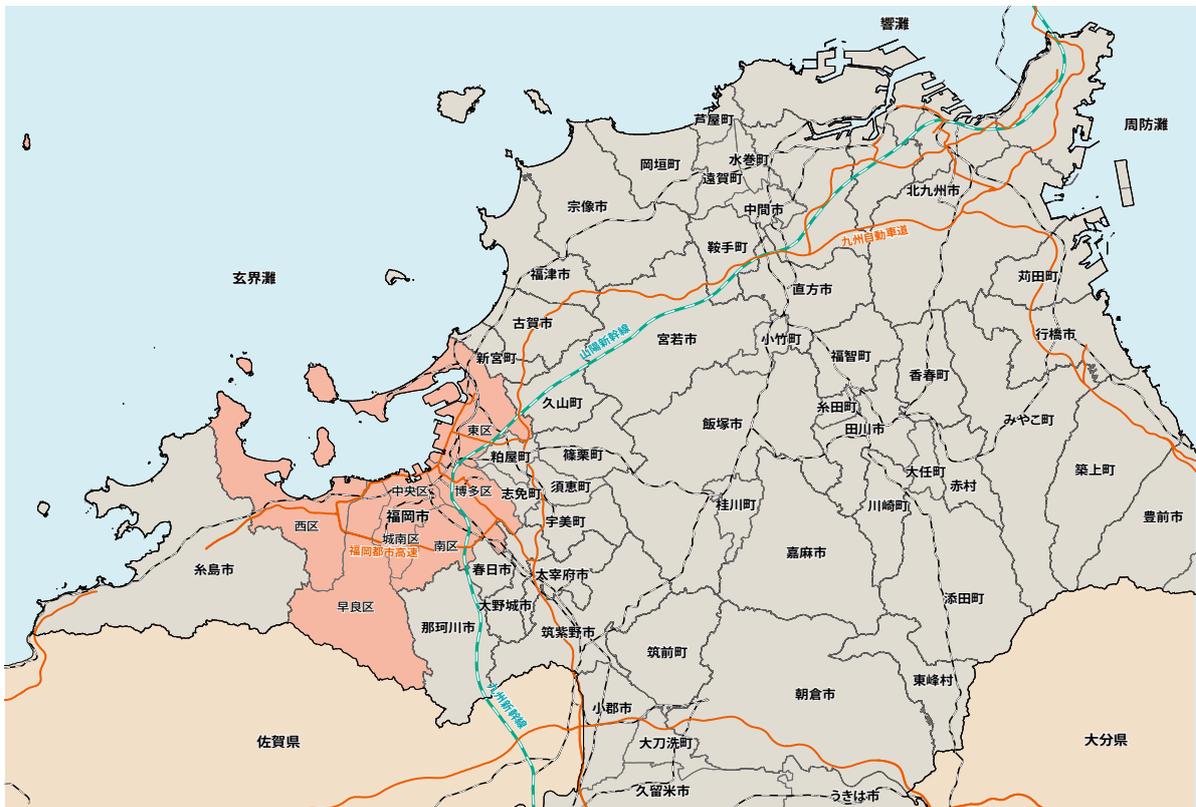
市政を開始した明治22(1889)年当時の市域は、面積5.09km²でした。その後、周辺の町村との合併を繰り返

し、昭和50(1975)年の^{さわら}早良町の編入をもっておおむね現在の市域となりました。さらに、海浜の埋め立てによっても市域は拡張し、現在の総面積は343.39km²となっています。

政令指定都市である本市は、7つの行政区(東、博多、中央、南、城南、早良、西)で構成され、北は玄界灘に面し、南は^{せふりさん}脊振山を境に佐賀県に接しています。



福岡市とアジアの位置関係



福岡市の位置



周辺町村編入の過程

2) 地勢

北は玄界灘と博多湾を臨み、三方を丘陵や山地に囲まれる半月形の形状をなしています。

●海・島しょ

北に玄界灘と博多湾が広がっており、博多湾は糸島半島や海の中道等に囲まれたおだやかな内湾となっています。その地形的条件から古くより海上交通の要所となってきました。また、博多湾は比較的水深が浅いため、海浜部は昭和50年代以降大規模に埋め立てられ、新たな港湾施設や、シーサイドももち地区、アイランドシティなどの居住域が形成されています。

沖合には、能古島^{のこのしま}、玄界島、小呂島^{おろのしま}などの島しょがあり、漁業を中心とした生活文化が形成されています。また、砂州^{さす}である海の中道の先端には本土と陸続きとなった志賀島^{しかのしま}が位置しています。

●平野

平野部は、東から糟屋平野^{かすや}、福岡平野、早良平野、糸島平野と呼ばれ、阿蘇火山の火砕物が堆積した台地や、河川の氾濫原^{はんらんげん}や段丘^{だんきゅう}などから成り、様々な自然の作用をうけ、より複雑な地形を形成しています。都市部と山間部の間には、ため池や草原、二次林などから構成される里地里山が広がります。

沿岸部は、海面水位の変動や沿岸流、河川作用などにより、砂州と砂丘が形成されています。最大の砂州である海の中道や、博多湾南岸の砂丘上では、漁業、製塩など海に関連する生業のほか、交易品が集積する港が成立しました。

砂丘の後背に広がる低地部では主に農業が営まれてきましたが、近代以降は都市化により宅地や商業地へと急速に変化しました。

●山・丘陵

東は立花山^{たちばなやま} (367.1m) を頂部とする立花丘陵^{しおうじ}や四王寺丘陵^{あぶらやま}、南から西には油山^{あぶらやま} (597m)、脊振山^{かなやま} (1,054.8m)、金山^{かなやま} (967.2m)、高祖山^{たかすやま} (416.1m) などが連なる脊振山地が位置しています。林業や狩猟、山間部を利用した農業が営まれるとともに、大規模な山岳寺院も開かれました。

●河川

河川の多くが、脊振山系の山と丘陵から、北に広がる玄界灘や博多湾に注いでいます。比較的流域の広い河川として、糟屋平野を流れる多々良川^{たたらがわ}、福岡平野を流れる御笠川^{みかさかわ}と那珂川^{なかがわ}、油山を源流とする樋井川^{ひいがわ}、および脊振山・金山・高祖山の山麓から水が集まる室見川^{むろみがわ}が挙げられます。

これらの流域には条里遺構^{じょうり}¹が残されるなど、人々の暮らしと川との歴史的な結びつきがうかがえます。一方で、河川の堆積により形成された低地部では、洪水氾濫により大規模な災害が発生することもありました。

¹条里遺構：条里制に基づく地割の痕跡のこと。古代の律令体制下で徴税を目的に導入された土地区画の制度を「条里制」いい、これに基づく地割は変容をとげながら中世まで機能した。一部地域では、その痕跡が現在まで残っている。



福岡市の地形

3) 地質

古生代～中世代の三郡変成岩類：蓮華変成岩類、白亜紀の深成岩類（花崗岩等）、古第三紀（中期始新世～前期漸新世）や第四紀（後期更新世～完新世）の堆積層や、砂層などで構成されています。岩石類は、弥生時代に石斧等の材料として用いられるほか各時代の生活用具の石材として活用されました。姪浜や祖原など古第三紀層の分布地では、明治時代から昭和30年代にかけて炭鉱が営まれ、本市の産業が発展するうえで重要な資源となりました。また、各所に散見される良質な粘土は、土器や陶器の材料としても利用されます。海岸部には、国指定天然記念物の長垂の含紅雲母ペグマタイト岩脈や名島の檣石などがあり、後者については特異な地質を見ることができます。



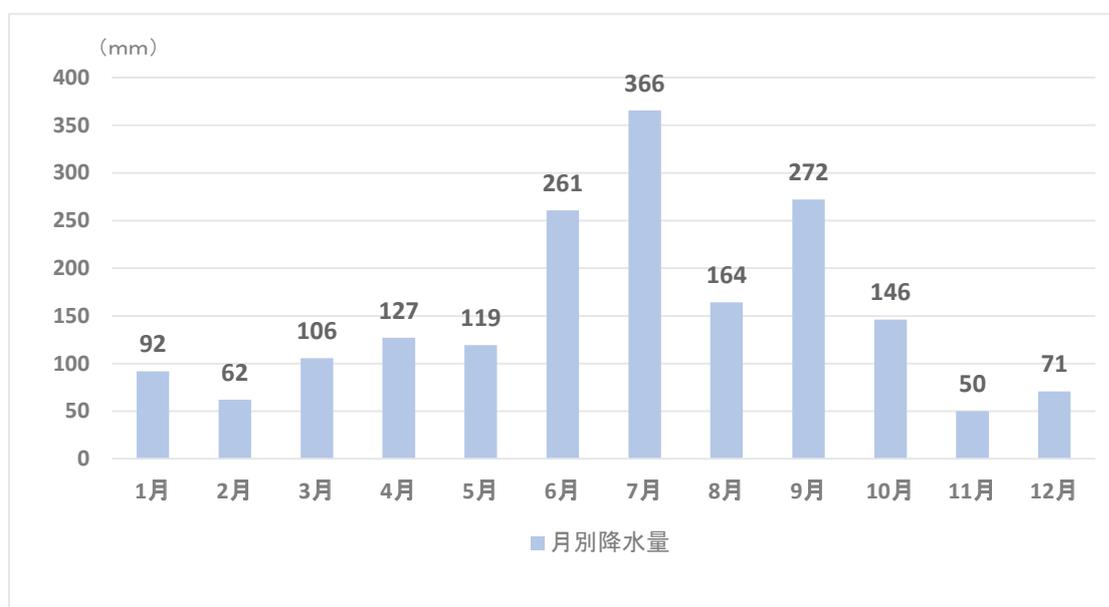
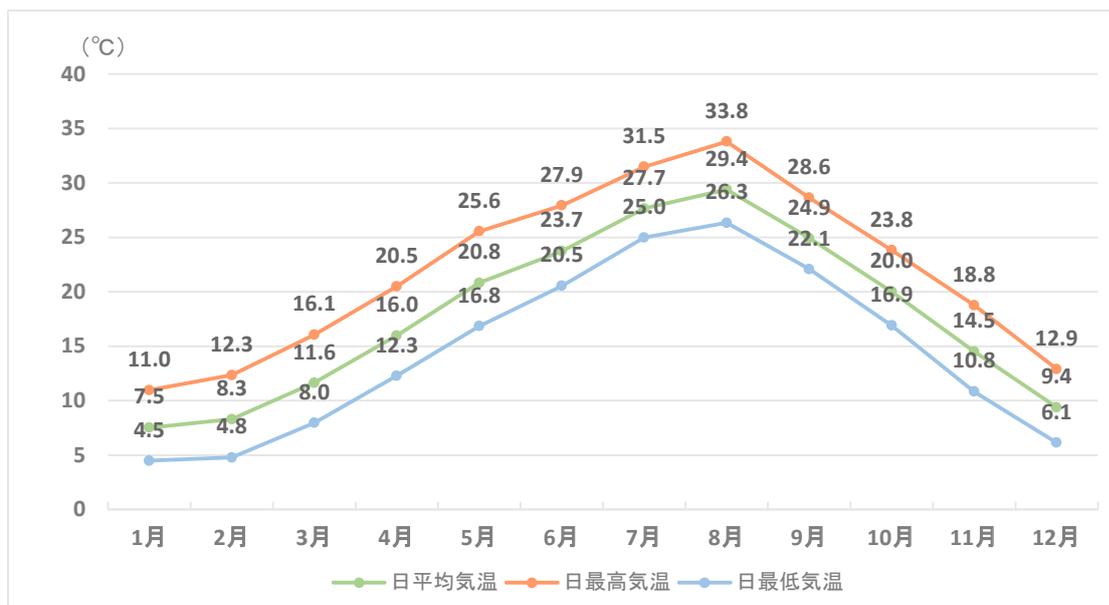
福岡市の地質図 (出典:「シームレス地質図」産業技術総合研究所 地質調査総合センター web サイト)

4) 気象

日本海側に面していますが、比較的温暖な太平洋型気候区に属しており、年間の平均気温は17.9℃となっています。

夏季は30℃以上の真夏日が続き、玄界灘を流れる暖流である対馬海流の影響により、冬季でも最低気温が氷点下を下回る日は多くありません。

年間降水量は1,800 mm程度で、初夏に到来する梅雨の影響で7月がピークとなっています。



福岡市の月別の気温・降水量 平成28(2016)年～令和2(2020)年 (出典：気象庁ウェブサイト)

5) 生態系

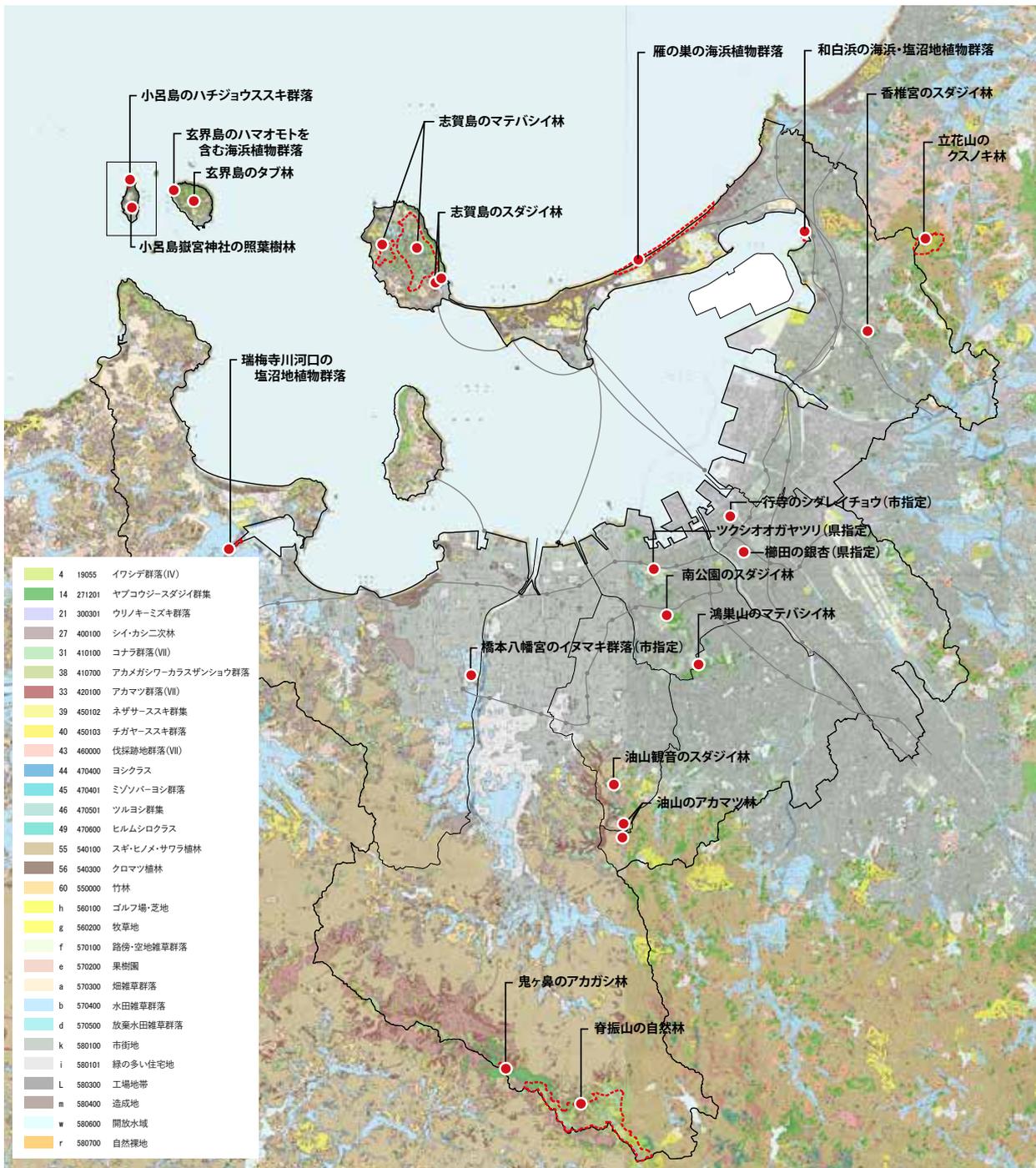
160万人を超える人口をかかえながらも、周辺は豊かな自然に囲まれています。北西の沿岸部は、^{げんかい}玄海国定公園の一部を構成し、南部の山地が糸島市から那珂川市に連なる脊振雷山^{らいざん}県立自然公園となっています。また、国指定鳥獣保護区である東区^{わじろひがた}の和白干潟・多々良川河口は東アジアの渡り鳥たちが立寄る“交差点”として重要な場所となっています。

本市には、海・島しょ、平野、山・丘陵、河川のそれぞれの地勢に応じて様々なタイプの自然環境があり、下記のような生物が生息しています。表中で下線のある動植物は、「市内の貴重・希少生物のリスト」に記載されています。

海・島しょ	<u>クロツラヘラサギ</u> 、 <u>ミヤコドリ</u> 、 <u>カブトガニ</u> 、 <u>ハクセンシオマネキ</u>	 <p>写真：カブトガニ</p>
平野 (里地里山)	オオルリ、キビタキ、ミヤマホオジロ、トノサマガエル、シマヘビ、タヌキ、カトリヤンマ、クロセセリ、ゴイシジミ、ヒラタクワガタ、アカマツ群落、ギンリョウソウ	 <p>写真：オオルリ</p>
山・丘陵	<u>ヤイロチョウ</u> 、 <u>アオバト</u> 、アオゲラ、タゴガエル、アサギマダラ、オナガフキバツタ、アカアシクワガタ、 <u>ブナ群落</u> 、ヨコヤマヒゲナガカミキリ、ウンゼンカンアオイ、タマゴケ	 <p>写真：アオバト</p>
河川	カワセミ、 <u>アカハライモリ</u> 、 <u>ハカタスジシマドジョウ</u> 、コムラサキ、ムカシトンボ、 <u>ツクシオオガヤツリ</u> 、 <u>イヌセンブリ</u>	 <p>写真：ツクシオオガヤツリ</p>

(令和2(2020)年3月「ふくおかの生きもの」を参考に作成)

文化財としては、次の図に示すように、^{ぎなん}櫛田神社の銀杏や福岡城の堀に自生する多年草の一種であるツクシオオガヤツリなどが県の天然記念物、橋本八幡宮のイヌマキ群落などが市の天然記念物に指定されています。



福岡市の植生図

(出典：「福岡市環境配慮指針 改定版 (平成 28 年 9 月)」

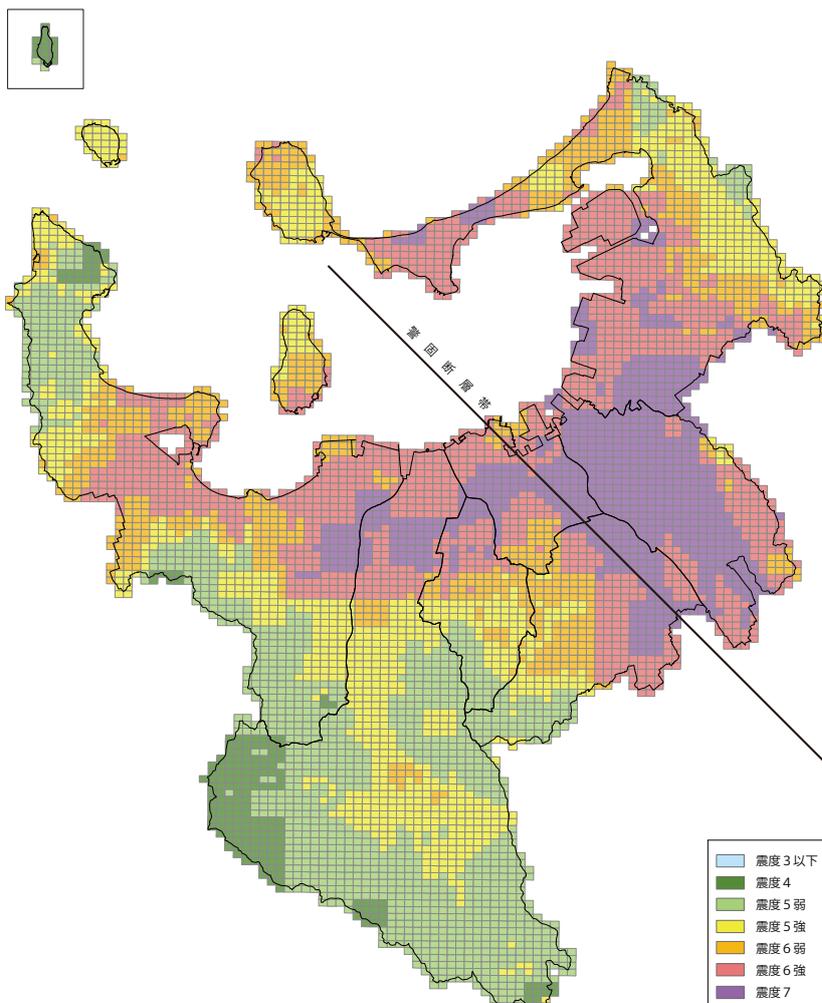
環境省 web サイト「生物多様性情報システム>自然環境保全基礎調査>1/2.5万現存植生図」より
特定植物群落及び福岡市指定文化財、福岡県指定文化財を图示)

6) 自然災害

本市には、玄界灘から福岡平野にかけて活断層帯である警固断層帯が走っています。地震調査研究推進本部が公表している長期評価では、30年以内の地震発生確率は0.6～3.0%とされ、地震が発生した際には、市内の大部分で震度6強以上の揺れが予想されています。

また、近年では福岡県下において台風や梅雨前線による広範囲な被害だけでなく、特定地域への集中的な降雨により、限定的な範囲ながらも、被害の規模が大きくなる傾向があります。

本市においても、平成11(1999)年に発生した福岡水害や、平成17(2005)年に発生した福岡県北西沖地震では、人的被害のほか文化財にも被害が出ました。



福岡市の想定地震地図（警固断層帯南東部）

(出典：「J-SHIS Map」国立開発研究法人防災科学技術研究所 web サイト)

福岡県における近年の災害

年月日		災害名	災害の種類
平成11(1999)年	6月29日	福岡水害	風水害・土砂災害
平成16(2004)年	9月4日～8日	台風18号	風水害・土砂災害
平成17(2005)年	3月20日	福岡県西方沖地震	地震
平成18(2006)年	9月15日～20日	台風13号	風水害・土砂災害
平成22(2010)年	7月10日～14日	梅雨前線	風水害・土砂災害
平成24(2012)年	7月11日～14日	平成24年7月九州北部豪雨	風水害・土砂災害
平成27(2015)年	8月25日	台風15号	強風
平成28(2016)年	4月14日～16日	平成28年熊本地震	地震
平成29(2017)年	7月5日～6日	平成29年7月九州北部豪雨	風水害・土砂災害
平成30(2018)年	6月28日～7月8日	平成30年7月西日本豪雨	風水害・土砂災害
令和2(2020)年	7月3日～31日	令和2年7月九州北部豪雨	風水害・土砂災害

(2) 社会環境

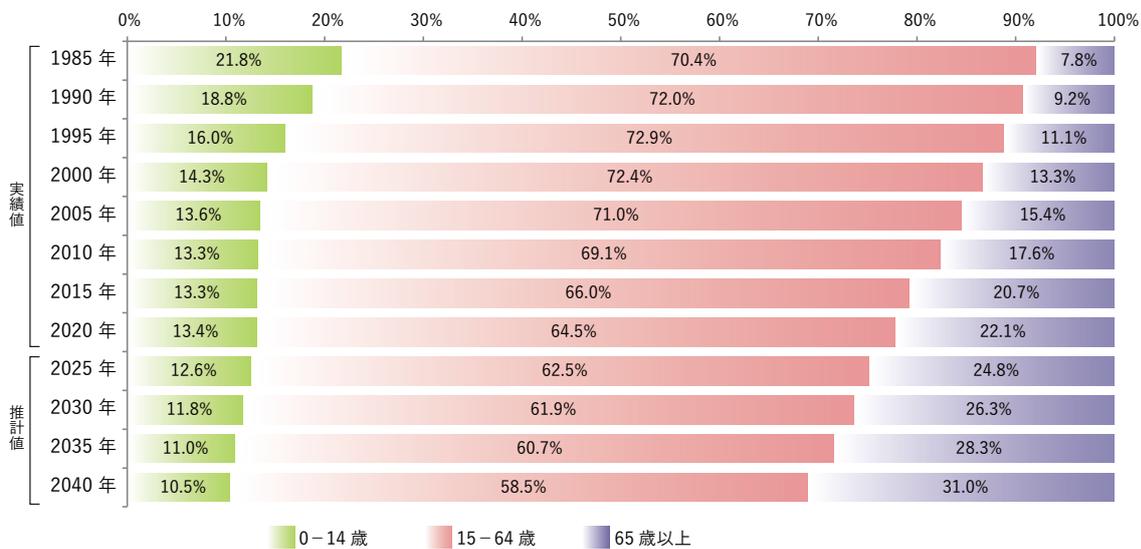
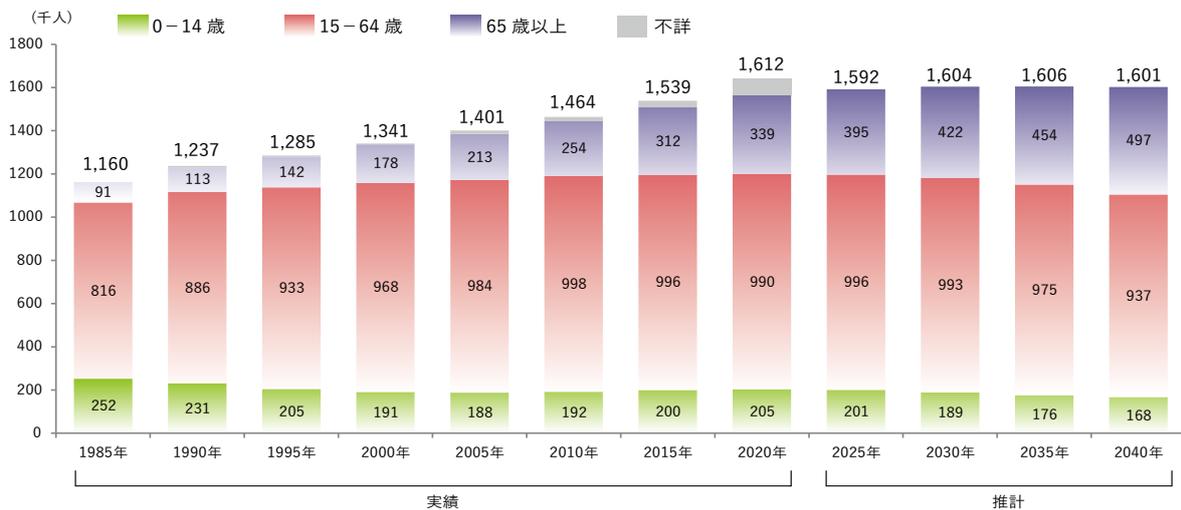
1) 人口

令和2(2020)年の国勢調査で約161万2千人であり、前回調査時点の平成27(2015)年と比較して、4.8%増加し、政令指定都市第5位の人口となっています。

特に、15～64歳の割合は64.5%と全国平均の59.2%を上回っており、特に10代・20代の割合が22.1%と政令指定都市のなかで最も高くなっています。これは、市内に大学および短期大学が20校立地しており、他都市と比べても学生数が多いためです。20校という数は中国地方、四国地方、九州地方の各県の大学数と比較しても最も多く、本市は「学生の街」といえます。

将来推計人口においても、日本全体の人口が減少する中で、本市では2035年頃まで増加が見込まれています。一方、年少人口(0～14歳)は平成17(2005)年頃から増加しているものの、2020年頃をピークに減少に向かう見込みです。

さらに、老年人口(65歳以上)は総人口の22.1%と全国平均の26.6%を下回るものの、前回より1.4ポイント上昇しており、高齢化が進んでいます。今後も一貫して老年人口

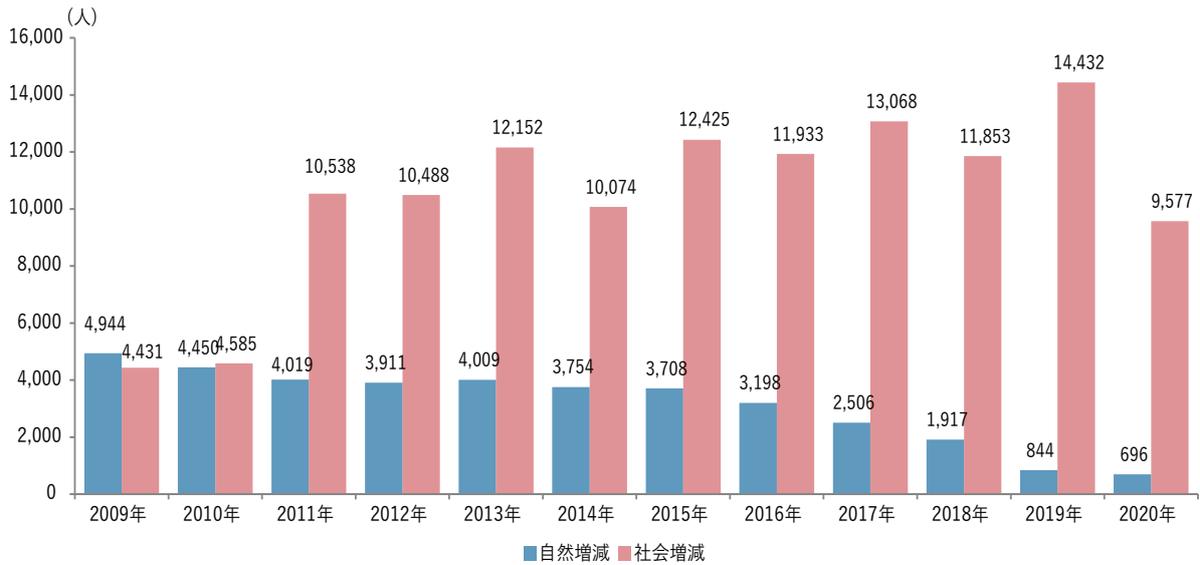


福岡市の推計人口と年齢構造の変化 (出典:「福岡市の将来推計人口」(2012年3月推計)を加工して作成)

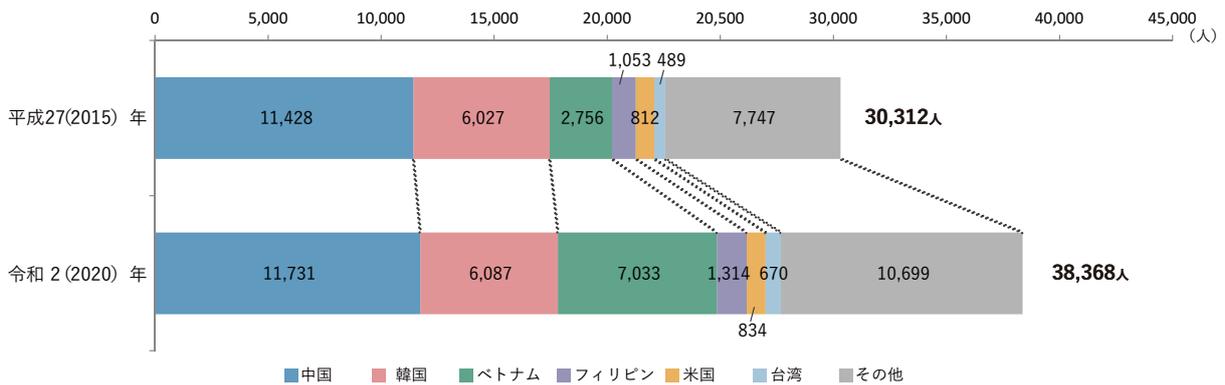
が増加し、2040年には全体の31%に達すると予想されています。

人口増加の要因は、主に社会増によるところが大きく、平成23(2011)年～令和元(2019)年までは毎年1万人以上の転入超過¹となっています。自然増減は出生数が死亡数を上回っていますが、近年では自然増が減少傾向にあります。

また、転入人口のなかには外国人も増加傾向にあります。平成27(2015)年～令和2(2020)年までの5年間で8,056人増加しています。



福岡市の人口動態（自然増減・社会増減²）（出典：住民基本台帳）



福岡市の在留外国人人口（出典：法務省在留外国人統計）

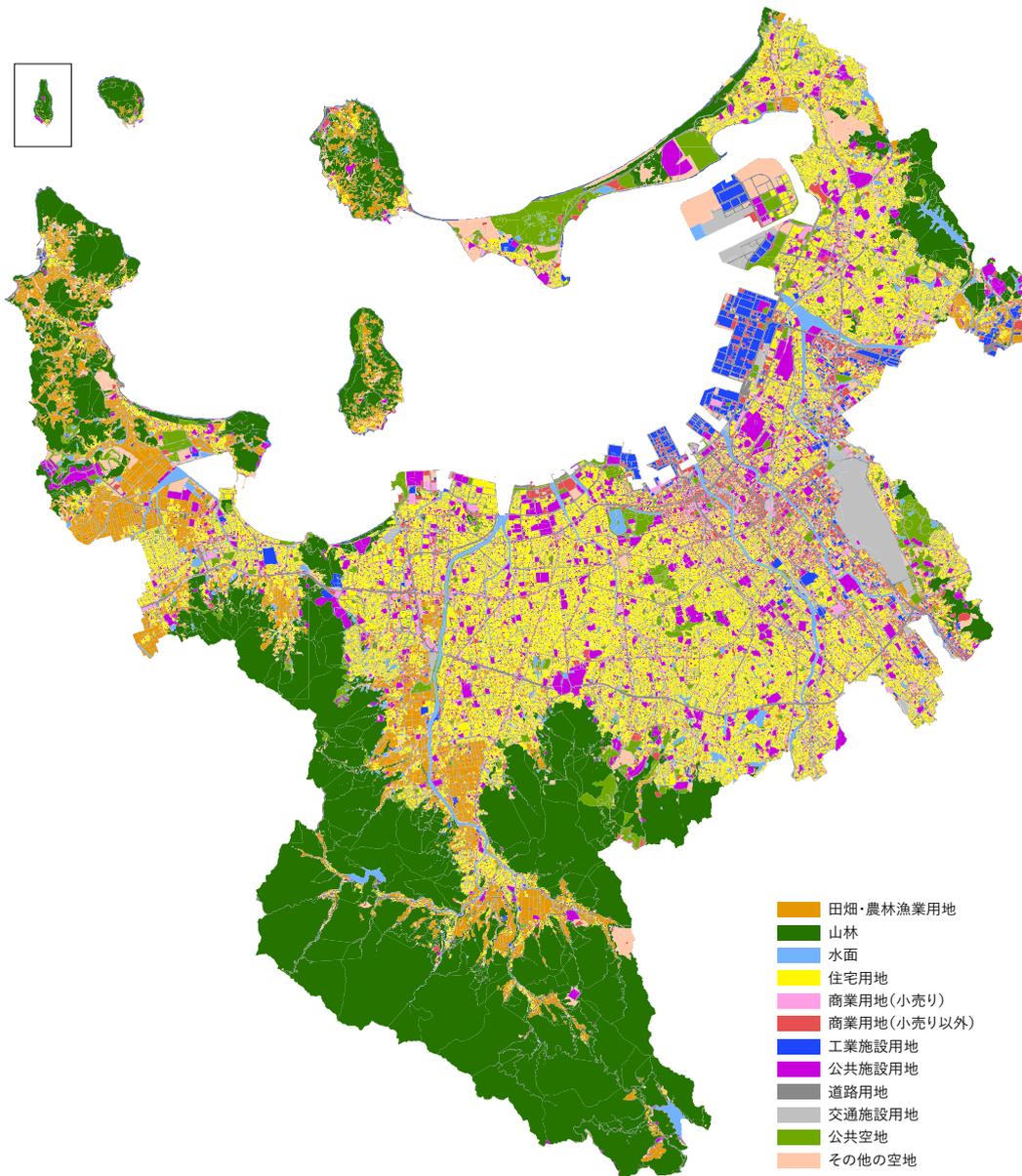
¹転入超過：人口動態において、ある特定の期間における、転入数が転出数を上回っている状態。

²社会増減：地方自治体や地域ブロック単位の人口における、住民の転入数と転出数の差を表す。

2) 土地利用

都心部を中心に商業用地が集積しており、郊外に向かって住宅用地が広がっていますが、南側や西側には山林が立地するため、市街地がおおむね 10 km 圏内にまとまっています。

市域の南側や西側の大部分は、山林や田畑・農林漁業用地となっています。西区のもとおか元岡、かなたけ金武、わきやま早良区の脇山周辺には農地が集積し、自然景観を保持しています。

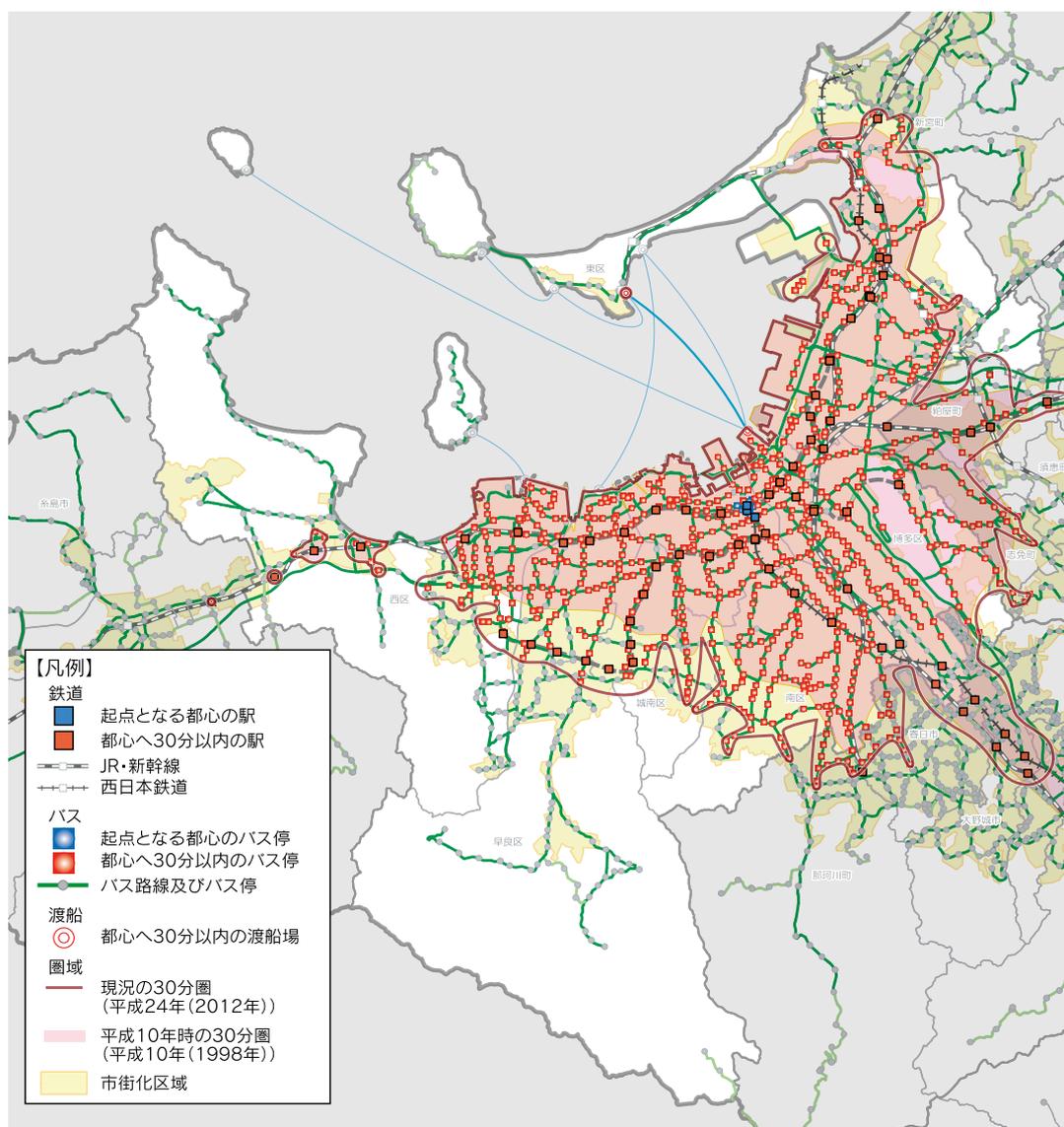


福岡市の土地利用現況図 (出典：平成 29 (2017) 年度都市計画基礎調査)

3) 交通・流通

主な公共交通機関は、鉄道と路線バス、島しょ部を結ぶ渡船等です。天神・博多の都心部を中心として、鉄道に沿ってY字型の形で都市が発展してきましたが、地下鉄ななくま七隈線の開業や福岡外環状道路、都市高速道路の整備等により、放射環状型の交通軸が形成されています。バス路線も充実していることから、市街化区域のほぼ全域が公共交通を利用して30分以内で都心へ移動することが可能であり、交通の利便性は高いと言えます。また、国内線・国際線を多数有する福岡空港や新幹線をはじめとした多くの鉄道路線が乗り入れている博多駅、九州島内を中心に全国と高速バス路線で結ぶ西鉄天神高速バスターミナル・博多バスターミナルは、九州の長距離交通の結節点となっています。福岡空港から都心までの所要時間は15分以内と短く、空港から都心部へのアクセスが良いことも特徴の1つです。

国際拠点港湾に位置付けられている博多港からは、国内外の主要港への航路ネットワークが築かれており、近年では、コンテナ取扱個数が増加しています。



福岡市の公共交通機関による30分圏域 (出典：福岡市総合交通戦略)

4) 産業

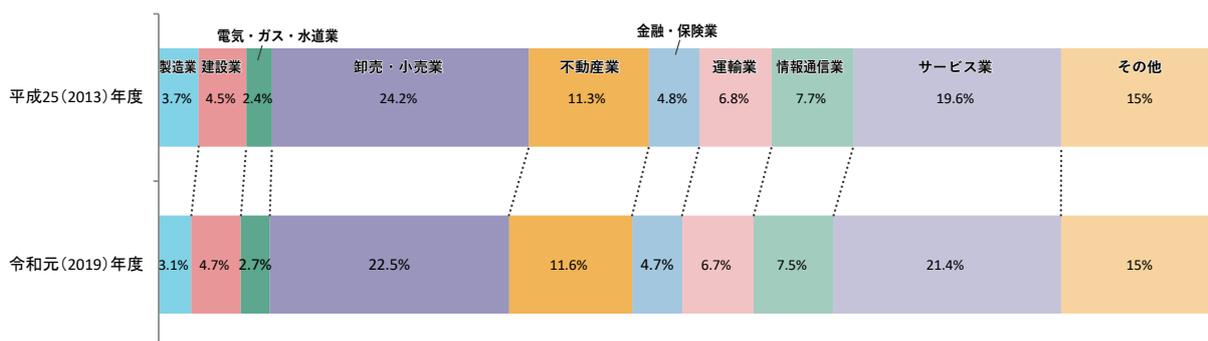
市内総生産における経済活動別の構成比では、第三次産業が全体の約9割を占めており、なかでもサービス業、卸売・小売業の割合が高く、全体の約4割となっています。

全国の多くの都市が、近代以降の工業化により発展してきた中において、第三次産業に特化した産業構造を構築してきたことにより、脱工業化による衰退を免れてきた側面もあります。

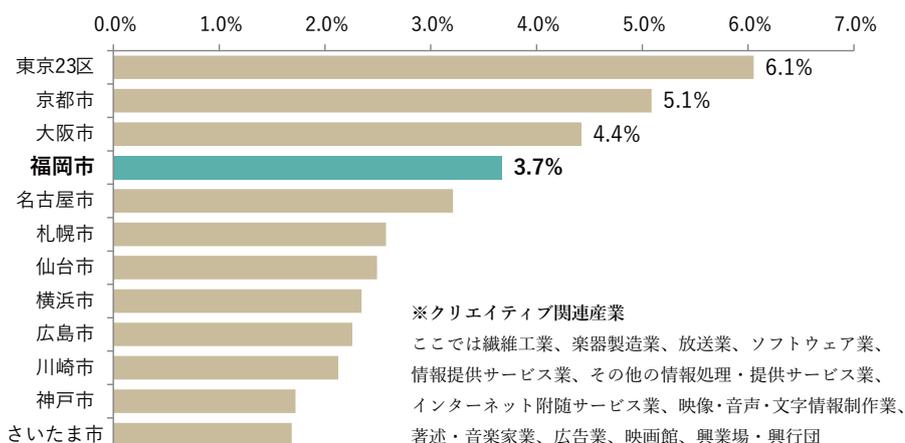
市内には、九州全域にまたがる交通や社会インフラ、また、マスメディアの本社が多く存在します。創業100年を超える事業者においては、企業資料が蓄積され、都市やまちなみの展開を考えるうえで重要な情報資産となっています。

近年では、ゲーム、デザイン、音楽などクリエイティブ関連産業事業所の全事業所に占める割合が、国内の人口100万人以上の大都市のうち4位になるなど、クリエイティブ関連産業の集中、拠点化がみられます。

また、本市は「グローバル創業・雇用創出特区¹」として、創業の支援と雇用の創出に取り組んでおり、政令指定都市と東京都区部を含む21大都市のなかでも開業率²が最も高くなるなどの成果を挙げています。



市内総生産における経済活動別の構成比 (出典：福岡市民経済計算)



クリエイティブ関連産業事業所が全事業所に占める割合 (出典：平成28年経済センサス活動調査)

¹グローバル創業・雇用創出特区：福岡市に設けられた「国家戦略特区」。福岡市では創業の支援と雇用の創出に取り組んでいる。「国家戦略特区」とは、日本の経済活性化を目的として、国が、地域限定で規制や制度を改革し、その効果を検証するために指定する特別な区域のことである。

²開業率：ある特定の期間における、既に存在していた事業所（または企業）に対する新規に開設された事業所（または企業）数の割合。

5) 観光

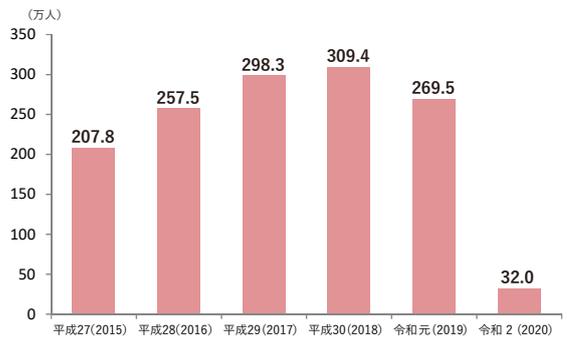
観光地としてのイメージが薄い一方で、平成 28 (2016) 年の入込観光客数は、2,000 万人を突破し、訪日外国人観光客などの増加により、令和元 (2019) 年まで過去最高を更新しています。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により令和 2 (2020) 年以降は大きく減少しています。

福岡空港および博多港からの外国人入国者数も同様の傾向を示しており、平成 30 (2018) 年には 300 万人を突破し、増加傾向を示していましたが、令和 2 (2020) 年には 32 万人と大きく減少しています。

また、本市では国際会議や見本市といった MICE でも同様に新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を受けており、令和 2 (2020) 年の国際会議開催件数は 15 件と大きく減少しています。



観光入込客数の推移
(出典：福岡市の観光・MICE 2021 年版)



外国人入国者の推移
(出典：福岡市の観光・MICE 2021 年版)

年		1位	2位	3位	4位	5位	6位
2013年	都市	東京	福岡	横浜	京都	大阪	名古屋
	件数	531	253	226	176	172	143
2014年	都市	東京	福岡	京都	横浜	名古屋	大阪
	件数	543	336	202	200	163	130
2015年	都市	東京	福岡	仙台	京都	横浜	名古屋
	件数	557	363	221	218	190	178
2016年	都市	東京	福岡	京都	神戸	名古屋	横浜
	件数	574	383	278	260	203	189
2017年	都市	東京	神戸	京都	福岡	名古屋	横浜
	件数	608	405	306	296	183	176
2018年	都市	東京	神戸	京都	福岡	名古屋	横浜
	件数	645	419	348	293	202	156
2019年	都市	東京	神戸	京都	福岡	横浜	名古屋
	件数	561	438	383	313	277	252
2020年	都市	東京	京都	神戸	福岡	千里地区(※1)	—(※2)
	件数	63	26	23	15	13	—

※1 千里地区は、大阪府豊中市、吹田市、茨木市、高槻市、箕面市を含む。

※2 10 件以下は非公表

国際会議の開催件数 (出典：日本政府観光局「国際会議統計」)

6) 文化芸術

文化芸術は、市民生活と都市に根ざし、都市を構成する要素であるとの認識のもと、令和元（2019）年に『福岡市文化芸術振興計画』を策定し、総合的・計画的に文化芸術施策を推進しています。

本市は、豊かな歴史文化を背景とする文化財やクリエイティブ関連分野の集積により、独自の創造活動が行われやすい環境にあるだけでなく、質の高い文化芸術を体験できる、舞台芸術や美術などテーマ性の高い文化施設から、市域、地域単位に設置された身近な文化施設まで、市民の文化芸術活動を支える施設が幅広く設置されています。

このような背景により、福岡市を主な拠点とし、年に1回以上の講演・展示等を実施した団体は、平成28（2016）年度には895団体、文化芸術分野のNPO法人¹も平成29（2017）年度には累計99団体を数え、文化芸術にかかわる活動が活発に行われています。

舞台芸術や美術などテーマ性の高い文化施設（『福岡市文化芸術振興計画』を改変）

舞台芸術系		ミュージアム系
演劇	音楽	
博多座 キャナルシティ劇場	アクロス福岡 ／福岡シンフォニーホール FFGホール	市美術館 福岡アジア美術館 市博物館 市総合図書館 市科学館

市民の活動等を支える文化施設（『福岡市文化芸術振興計画』を改変）

	発表・鑑賞			その他（セミナー等）
	1,000席以上	500席以上	500席未満	
市域	サンパレス （後継施設の整備を検討中） 市民会館 ／大ホール ※拠点文化施設／大ホールとして更新 [2024年供用開始予定]	拠点文化施設 ／中ホール [2024年供用開始予定] ももちパレス ／大ホール	あいれふホール 拠点文化施設 ／文化活動交流ホール [2024年供用開始予定] 祇園音楽・演劇練習場 市総合図書館 ／映像ホール・シネラ	市美術館 ／ミュージアムホール 福岡アジア美術館 ／あじびホール 市博物館 ／講堂 ふくふくプラザ ／ホール 市科学館 ／サイエンスホール
地域		各区市民センター ／ホール	地域交流センター ／ホール	

¹NPO法人：医療・福祉、環境、国際協力・交流などの社会貢献活動を行う、民間非営利組織・団体（「NPO」）のうち、特定非営利活動促進法に基づき法人格を取得した法人のこと。

(3) 歴史環境

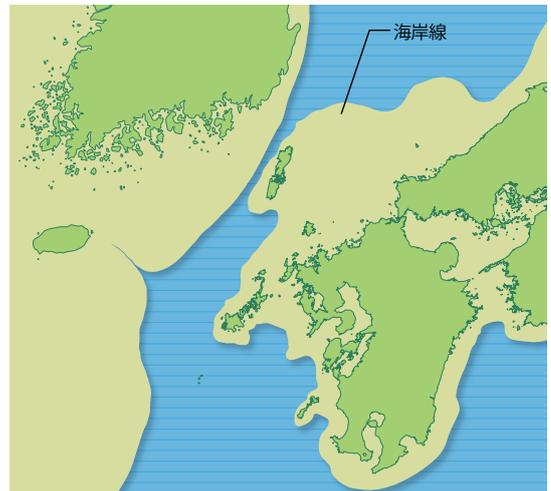
良好な内湾である博多湾を有する本市は、古くから海を通じた交流を軸として発展してきました。

ここでは、本市の歴史を原始から近現代までの大きく5つの時代区分で整理します。

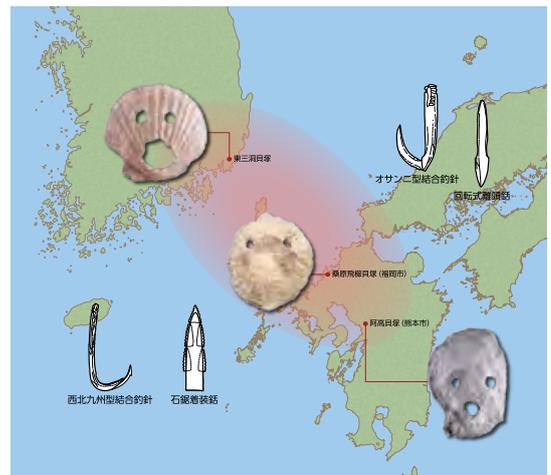
1) 原始 (旧石器時代～古墳時代)

本市域に人が住みはじめたのは、旧石器時代の約3万年前と考えられています。当時、海面は現在より低く、玄界灘には陸地が広がっており、現在の市域は海とは遠く離れた土地でした。縄文時代になって、気候の温暖化とともに次第に海面が上昇していき、玄界灘や博多湾が出現すると、人々は狩猟や採集に加え、魚介類を求めて積極的に海へ進出して行きました。また、船の製作技術や航海術の向上によって、中国大陸や朝鮮半島との交流は活発になりました。

弥生時代、そのような交流を通して、日本の中でも早い時期に水稲耕作や金属器製作などの技術が伝わりました。水稲耕作のために集落がつくられ、やがて、小さなムラが統合されて広い地域を統括する国が生まれました。福岡平野では奴国、糸島平野では伊都国が大きな勢力を持ち、それぞれが中国と直接交渉を行い、奴の国王は後漢の皇帝から金印「漢委奴国王」を与えられました。



約2万年前の陸地



朝鮮半島と九州から出土する貝面、漁具



国宝 金印「漢委奴国王」



金印の通った道

古墳時代、畿内を中心に大和政権が成立すると、各地に前方後円墳が築かれ、その影響はこの地にも及びました。海上交通を掌握したこの地の豪族たちは、大和政権が朝鮮半島南部の伽耶^{カヤ}地域や百濟^{ベクチェ}と交渉・交易する際に、パイプ役として活躍していたと考えられます。



鋤崎古墳の初期横穴式石室（模型）

2) 古代（飛鳥時代～平安時代）

朝鮮半島内で政治情勢が不安定になると、大和政権は地方支配の拠点として設置した、博多湾岸の「那津官家」や「筑紫大宰」に軍事拠点としての役割を持たせました。齊明天皇6（660）年に百濟が滅亡すると、大和政権は百濟復興のために救援軍を送りましたが、天智天皇2（663）年の白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れました。国防・政治体制の変革に迫られた大和政権は、筑紫大宰を福岡平野の奥に移し、周辺に、土塁と外濠をあわせもつ城壁である水城^{みずき}や、山城である大野城^{おののじょう}・基肄城^{きいじょう}等の防衛施設を築き、能古島等の湾岸には防人を配置しました。

大宝元（701）年には九州全体の統括と外交・軍事を担うべく「大宰府」の機能や制度が整備されました。大宰府の附属機関として博多湾岸に設置された「筑紫館」は、外国からの使者の迎賓や、唐や新羅へ渡る使節の出発・帰国の場として機能しました。

平安時代に入り、この施設は唐の外交施設である鴻臚寺^{こうろじ}にならって「鴻臚館」の名称で呼ばれるようになりました。9世紀以降、遣唐使^{けんとうし}が派遣されなくなった頃には、唐や新羅の貿易商人たちとの交易の拠点へと変わっていきました。



鴻臚館跡（復元図 CG）

3) 中世（平安時代～戦国時代）

11世紀後半に鴻臚館がその役割を終えると、宋の商人たちの交易の拠点は博多へと移り、鎌倉時代にかけて、民間主導の貿易が活発化しました。宋の商人たちの中には博多の町に定住する者もあり、「博多綱首」とも呼ばれました。博多の町には「唐物」と呼ばれる大陸からもたらされた文物があふれてにぎわいました。



博多遺跡群出土の青磁碗

国際貿易都市としてにぎわっていた博多ですが、文永11(1274)年、元軍の襲来に見舞われ、博多の町や宮崎宮等が大きな被害を受けました。その後、鎌倉幕府は防衛のため、博多湾沿岸一帯に石築地(元寇防塁)を築造しました。弘安4(1281)年に再び元が襲来しましたが、この時は、上陸による被害を阻止することができました。幕府は、さらなる襲来に備えて、博多湾岸の警備を強化し、九州の訴訟裁断・軍事を統括する鎮西探題を設置しました。

室町時代には、博多の商人によって日明貿易が主導され、明のほか朝鮮・琉球・東南アジアとの交易が行われました。そのため、地域権力にとって、博多を支配することは重要な課題でした。戦国時代には、大友、大内、龍造寺、毛利など有力な戦国大名が博多をめぐる激しく争い、博多の町は焼打ちなどによって大きな被害を受けました。



生の松原地区の石築地（元寇防塁）

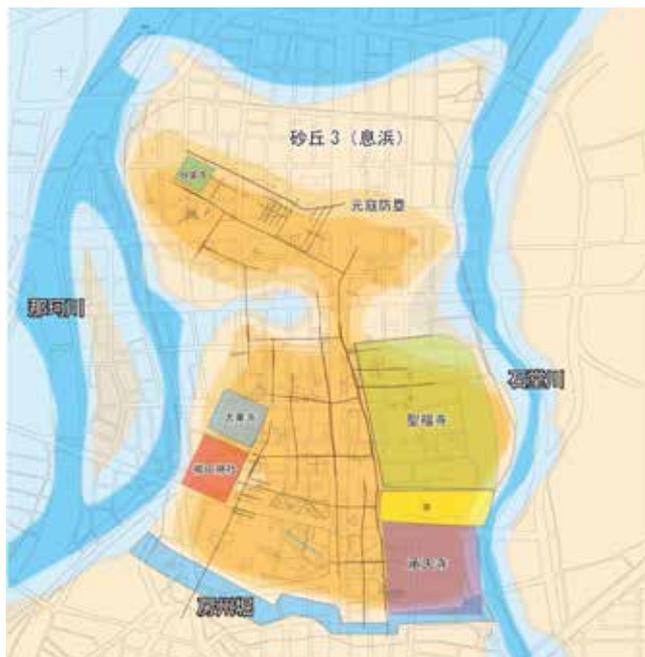


博多湾沿岸に築かれた石築地

4) 近世（安土桃山時代～江戸時代）

天正^{てんしょう}15（1587）年に豊臣秀吉^{とよとみひでよし}が九州平定を成し遂げた後、焼けた博多の町は太閤町割により再編が行われました。この時に現在の博多の市街地形成のベースが整備されました。秀吉は、博多商人の経済活動に保護を与え、これによって博多の町は再び活気を取り戻しました。

その後、関ヶ原^{せきがはら}の戦いの功績により筑前国^{ちくぜんのかくに}を与えられた黒田長政^{くろだながまさ}が、福岡藩初代藩主となりました。長政ははじめ、名島城^{なしまじょう}に入りましたが、城下町の発展に不便な地であったため、博多の西に新たに福岡城と城下町を建設しました。こうして、那珂川を境にして、城下町「武士の町・福岡」と中世に国際貿易都市として栄えた「商人の町・博多」が併立する「双子都市」が誕生しました。参勤交代制度や海運業等の発展などによって、陸・海の交通網が整備されました。唐津街道には箱崎・姪浜^{いまいじゅく}・今宿^{いませ}に、三瀬街道には金武・飯場^{いしば}に宿場が置かれました。この頃、唐泊^{からどまり}・宮浦^{みやのうら}・今津^{いまづ}・浜崎^{はまさき}・残島^{のこのしま}（能古島^{いかせん}）の廻船業者による筑前五ヶ浦廻船は大きな利益を上げていました。



16世紀後半の博多



正保福博惣図

5) 近現代（明治時代～）

明治時代になり、廃藩置県^{はいはんちけん}によって福岡県が発足したのち、明治22（1889）年に「福岡市」が誕生しました。発足時は面積約5 km²・人口約5万人で、九州では鹿児島市、長崎市に次ぐ人口でした。明治22（1889）年の博多駅開業、明治32（1899）年の博多港開港および明治36（1903）年の京都帝国大学福岡医科大学（現在の九州大学医学部）の設置などを経て、明治43（1910）年には現在の天神地区で第13回九州沖縄八県連合共進会が開催され、その跡地は市街地の整備が進みました。大正時代以降は、周辺町村との合併を繰り返し、昭和50（1975）年には本市は九州一の都市へと発展しました。

第二次世界大戦中、昭和20（1945）年6月19日にはアメリカ軍による空襲で、市内の中心部は大きな被害を受けました（福岡大空襲）。戦後は焼け野原からの復興を目指し、主要道路や鉄道網の整備が進み、市街地は徐々ににぎわいを取り戻していきました。また、第三次産業に特化した産業構造の構築が人口集中をもたらし、さらに、福岡空港の供用開始や山陽新幹線の全線開通によって陸・



福岡大空襲後の福岡市街

海・空の玄関が整備され、昭和50年代には人口が100万人を突破しました。

平成元（1989）年にはアジア太平洋博覧会'89（よかトピア）が開催され、これを契機として、国際イベントの開催やアジアを意識した施設の充実が図られ、福岡を訪れる外国人の数も大幅に増えてきました。近年では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響をうけつつも、アジアの交流拠点都市として発展を続けています。

1-2 市内に所在する文化財の概要

(1) 文化財保護法等による指定・登録の状況

市内において文化財保護法や福岡市文化財保護条例等に基づき指定・登録された文化財の数は514件（令和4（2022）年5月現在）です。その内訳は国指定文化財が92件、県指定文化財が107件、市指定文化財が226件、国登録文化財が44件、市登録文化財が45件となっています。

類型別に見ると、建造物が最も件数が多く、近世の寺社を中心に100件の建造物が指定・登録されています。なお、国の重要無形民俗文化財である「博多祇園山笠行事」^{はかたぎおんやまかさ}は、ユネスコ無形文化遺産¹にも登録されています。

市内の指定・登録文化財の件数（令和4（2022）年5月現在）

部門	種別	国指定	県指定	市指定	国登録	市登録	合計
有形文化財	建造物	9	11	16	43	21	100
	絵画	13	6	16	-	-	35
	彫刻	11	12	22	-	-	45
	工芸品	20 (3)	15	21	-	-	56
	書跡・典籍・古文書	11 (1)	6	31	-	-	48
	考古資料	10 (1)	16	57	-	-	83
	歴史資料	-	2	6	-	-	8
無形文化財	芸能	-	3	2	-	-	5
	工芸技術	1	4	-	-	-	5
民俗文化財	有形民俗文化財	-	17	14	-	-	31
	無形民俗文化財	2	7	21	-	24	54
記念物	遺跡	13	5	14	-	-	32
	名勝地	-	-	2	1	-	3
	動物・植物・地質鉱物	2	3	4	-	-	9
合計		92 (5)	107	226	44	45	514

もの
 ばしょ
 いとなみ

※国指定のうち（）内は、国宝の件数

¹ユネスコ無形文化遺産：「無形文化遺産の保護に関する条約」第2条において、「慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるもの」と定義されている。

条約には、締約国が自国内で目録を作成し、保護措置をとること、また、国際的な保護の措置として、「人類の無形文化遺産代表的な一覧表」や「緊急に保護する必要がある無形文化遺産の一覧表」の作成、国際的な援助などが定められている。

(2) 未指定・未登録の文化財の把握

本市では、指定・登録文化財以外の文化財についても、その把握を目的とした調査を行っています。令和4（2022）年5月現在に把握している、市内に所在する未指定・未登録文化財は、28,113件です。

その内訳は、「もの」の文化財では22,864件（うち建物19,921件、考古遺物2,943件）、「ばしょ」の文化財では3,829件（うち名所895件、跡地1,039件、自然1,895件）、「いとなみ」の文化財では651件（うち信仰・伝統行事・祭り・芸能607件、伝統技術・生業44件）となっています。

未指定・未登録文化財の件数（令和4（2022）年5月現在）

文化財		件数
もの	建物	19,921
	美術工芸	—
	考古遺物	2,943
	記録	—
	民芸品	—
ばしょ	町並み	—
	名所	895
	跡地	1,039
	自然	1,895
いとなみ	信仰	607
	伝統行事	
	祭り・芸能	
	伝統技術	44
	生業	
	食文化	—
合計		28,113

この表は、平成22（2010）・23（2011）年度に実施した「福岡市内所在文化財悉皆調査」（P60参照）と、福岡市埋蔵文化財センターの収蔵台帳を基に作成しました。そのほかの文化財については、今後、整理・把握を行っていきます。

(3) 市内に所在する文化財の概要

本計画では、本市の歴史や文化等の理解のために必要なすべての文化的所産を「文化財」と定義し、「もの」・「ばしょ」・「いとなみ」を本計画における文化財のカテゴリとして用いています。3つのカテゴリに分けて市内に所在する文化財の特徴を示します。

なお本計画における文化財の定義では、寺社は、施設全体をとらえる場合は「ばしょ」、個別の建物は「もの」に区別されますが、以下の解説では両者を「ばしょ」の中で記しています。

1) もの（美術工芸、考古遺物、建物など）

●地域に伝えられた文化財

寺社や地域コミュニティが大切に伝えてきた文化財には、代々にわたる重宝もあれば、長年人の目に触れることなく伝わり、近年の調査で新たに価値が見いだされたものもあります。博多湾岸には中世以前の創建と伝えられる寺社が多く位置し、外国文化の移入や航海の安全祈願に関わるものなど、対外交流の舞台として発展してきた本市ならではの歴史文化を示す文化財が豊富にのこされています。特に聖福寺、承天寺、崇福寺（いずれも臨済宗）といった著名な禅宗寺院や、東長寺（真言宗）、善導寺（浄土宗）、萬行寺（浄土真宗）といった古刹、宮崎宮、櫛田神社などの神社が所蔵する文化財については福岡県や本市による悉皆調査が行われ、目録が作成されるとともに、その一部は国・県・市の指定文化財となっています。承天寺の木造釈迦如来及両脇侍像や絹本著色楊柳観音像（甲本、乙本）、東長寺の木造千手観音立像、などは、その代表といえます。

対外交流を物語る文化財としては、聖福寺の絹本著色大鑑禅師像、今津の誓願寺にある栄西直筆と伝わる孟蘭盆縁起、同じく今津の勝福寺の絹本著色大覚禅師像、姪浜の興徳寺の絹本著色大応国師像などの、博多や周辺地区が禅宗文化の窓口となっていたことをうかがわせる文化財が挙げられます。また、箱崎の将軍地蔵と呼ばれる石造地蔵菩薩坐像は、平重盛が中国宋の育王山に金を送った際にもたらされたという伝承が『筑前国統風土記』に記されており、同じく箱崎の恵光院に建つ石塔と灯籠堂の本尊である石造の十一面観音像は、対外交流の中で中国南宋から持ち込まれた可能性が指摘されています。さらに、寺社の境内等でみかけることの多い礎石は、船に関連する博多湾周辺に特徴的な文化財で、交流の痕跡を今に伝えています。西区の小田観音堂の木造千手観音菩薩立像や志賀島の莊厳寺の聖観音菩薩立像は、航海の安全を祈願する当時の人々の願いが込められた仏像です。

また、地域の歴史を伝えるものとしては、志賀海神社文書や飯盛神社文書、明法寺榊文書などの文書や、中世以前の博多の様子を知ることができる聖福寺古図、安山借屋牒などが挙げられます。その他、櫛田神社や若八幡宮の力石、博多祇園山笠等の祭礼に関わる記録や絵画、江戸時代の廻船を描いた西浦の大歳神社の絵馬など、寺社

が所蔵する多様な文化財が地域のアイデンティティを支えています。

一方で、^{あそうけ} 笹崎宮神職の田村家、黒田家家臣であった麻生家、地域の有力者である^{とりかいけ} 鳥飼家や^{はまちけ} 濱地家などの旧家に伝えられた古文書からも、地域のルーツを知ることができます。

建物では、^{おおうちよしたか} 笹崎宮の本殿と^{こぼやかわたかかげ} 拝殿は大内義隆、^{こぼやかわたかかげ} 楼門は小早川隆景により寄進されたもので、市内に現存する最古のものです。また^{そうふくじ} 崇福寺の山門は^{おもてごもん} 福岡城本丸表御門から移築され、^{からもん} 唐門は名島城の遺構と伝えられています。住吉神社と^{かしいぐう} 香椎宮の本殿は元和9（1623）年、^{きょうわ} 享和元（1801）年にそれぞれ福岡藩主によって建てられ、今にその姿を残しています。笹崎宮の一の鳥居は初代藩主黒田長政によって寄進されたものです。それ以前から存在した楼門、拝殿、本殿と合わせて、鳥居を含めた境内の景観は江戸時代前期から変わらぬものとなっています。

都市の周縁部では、^{ごうしゃ} 旧早良郷七ヶ村の郷社であった^{てんめい} 飯盛神社本殿が、江戸時代の天明6（1786）年の建築です。また、博多湾に浮かぶ^{しらひげじんしゃ} 能古島に建つ白鬚神社の拝殿、本殿も江戸時代に遡る建築です。ここには建物の履歴を示す多くの^{むなふだ} 棟札が残されており、建物の歴史的価値を高めています。

町家としては、かつて旧街道の宿場に建っていた博多の旧三浦家住宅、姪浜の旧山下手住宅が、移築され市指定文化財となり観光施設として活用されています。また国や市の登録文化財となっている町家も市内に点在しています。

近代では、明治43（1910）年の第13回九州沖縄八県連合共進会の来賓接待所として西中洲の一角に建てられた建物が、現在、^{こうかいどうきひんかん} 公会堂貴賓館として公開されています。また現在、^{あかれんがぶんかかん} 福岡市赤煉瓦文化館として親しまれている建物は、元は日本生命保険株式会社の九州支店として明治42（1909）年に建てられたものです。設計者は日本近代建築の先駆者として知られる^{たつのきんご} 辰野金吾と、その弟子である^{かたおかやすし} 片岡安です。教育関係では、明治44（1911）年に箱崎に設置された九州帝国大学の箱崎キャンパス敷地に、設立当初からの正門や、大正から昭和初期に当時建築課長であった^{くらたけん} 倉田謙設計の校舎が残されています。学校校舎は、関東大震災を契機として鉄筋コンクリート化が進み、福岡でも昭和初期に建てられた小学校の校舎のほとんどが建て替えられましたが、唯一旧大名小学校（昭和4（1929）年）が残っています。高等学校では、県立の福岡高等学校校舎（昭和4（1929）年）が保存されています。木造の建物としては、住吉神社能楽殿が昭和11（1936）年に建てられた近代和風建築の代表的な建物です。他にも^{まがりぶちすいげんちすいどうしせつ} 曲渚水源地水道施設（曲渚ダム）や名島橋（多々良川橋梁群）は、近代の社会資本整備に伴い大正から昭和初期に造られましたが、これらは現在も現役の施設として機能しています。このように福岡市には、中世以降、各時



市指定有形文化財 曲渚水源地水道施設

代や分野を代表する建物が残り、市域の歴史をその姿から伝えています。

●博物館等に収蔵された文化財

福岡市博物館や福岡市美術館をはじめとする市内の博物館等には、本市の歴史や文化、くらしを知るうえで重要な考古・歴史・美術・民俗資料が体系的に収蔵されています。現在、その数は、福岡市博物館では約18万件、福岡市美術館では約1万6千点、福岡市アジア美術館では約4千点、福岡市総合図書館では約8万点を数えます。これらの資料は、所有者の世代交代や防犯・防災、保存環境の変化などさまざまな事情により、寺社や地域コミュニティ、個人をはじめとする所有者等の手から離れた文化財であり、博物館等が寄贈・寄託・購入という手続きを経て収蔵したものです。

福岡市博物館には、福岡藩主黒田家やその家臣団に伝来した資料、博多商人である嶋井宗室・大賀宗九しまいそうしつ おおがそうくの家に伝来した資料のほか、郷土史家安川巖やすかわいわおが収集した資料など、本市の歴史を語るうえで欠かせない資料が収蔵されています。黒田家の資料の中には、金印「漢委奴国王」や名物「圧切長谷部」・名物「日光一文字」といった国宝の刀剣、歴代の甲冑や肖像画、古文書、調度品類が含まれています。また、献上博多織の第一人者小川善三郎おがわぜんざぶろうや博多人形師小島与一こじまよいち、原田嘉平はらだかへいの作品群など、歴史の中で培われた技術や産業を伝える文化財もあります。

さらに、山笠行事や宮崎宮放生会ほうじょうやの幕出し等で使用された奈良屋町若者組道具をはじめとする各地で行われる祭礼や年中行事にかかわる道具、能古島や小呂島、玄界島などの島しょ部で使用されていた漁具や平野部で使用されていた農具などの生業に関する資料、明治・大正・昭和時代における人びとのくらしを伝える石橋源一郎いしはしげんいちろうが収集した写真等の記録資料など、人々の暮らしぶりを知ることのできる多種多様な文化財があり、展示等で公開・活用されています。また、アジア太平洋博覧会（平成元（1989）年開催）や第18回夏季ユニバーシアード（平成7（1995）年開催）に関連する資料も、本市のあゆみを振り返る上で重要であるといえます。



奈良屋町若者組道具 野風炉

福岡市美術館にも、泰西風俗図屏風たいせいふうぞくずびょうぶや波螺鈿鞍なみらでんくらをはじめとする重要文化財を含む福岡藩主黒田家に伝来した資料が収蔵されています。このほかにも、博多区吉塚に所在する薬王密寺東光院やくおうみつじとうこういんより寄贈された重要文化財25軀を含む仏像群、日本で最初の禅宗寺院である聖福寺の住職として有名な仙厓義梵せんがいきぼんによる軽妙な書画など、地域の歴史や文化を伝える文化財があります。



東光院仏教美術資料

また、戦後の電力再編事業を通して日本の発展に寄与した松永安左エ門^{まつながやすぎえもん}が収集した、茶道具や仏教美術などの重要文化財 20 件を含むコレクションをはじめ、地域ゆかりの実業家、文化人より寄贈された多彩な作品を所蔵しており、展示や教育普及活動を通じてその価値と魅力を伝えています。

福岡市総合図書館にも、櫛田神社の神官祝部家^{ほおりけ}に伝来した資料や博多商人神屋宗湛^{かみやそうたん}の家に伝来した資料、福岡の海事史を研究した高田茂廣氏^{たかたしげひろ}が収集した資料など、本市の歴史を伝える重要な資料を収蔵しています。

また、福岡市市民福祉プラザでは、戦後に博多港に引き揚げた多くの市民から提供された資料が展示されており、戦争の歴史を伝えています。

●地中から発見された文化財

発掘調査などによって遺跡から出土する資料（考古遺物）は、中世以前に遡るものが中心です。

江戸時代に志賀島で発見された金印「漢委奴国王」^{きんいん かのわのなのこくおう}は、中国の歴史書『後漢書』東夷伝に記載のある「倭奴国」を示すと考えられ、本市が古くから対外交流の拠点となっていたことを表す象徴的なものです。弥生時代では『魏志倭人伝』の奴国や伊都国に関連する遺跡が見つかっています。

板付遺跡^{ささい}や雀居遺跡^{いまいゆくごろうえ}、今宿五郎江遺跡といった弥生時代の大規模集落遺跡では、日常的に使われる土器のほか、農具や工具に使われた石器、木製品、金属製品が出土しています。これらに加え、比恵・那珂遺跡群^{ひえ なか}や井尻 B 遺跡では、当時の最先端技術であった金属やガラスの加工に関わる鋳型や坩堝^{いがた るつぼ}なども見られます。墳墓遺跡では甕棺^{かめかん}が特徴的にみられ、吉武遺跡群^{ひがしいるべ}や東入部遺跡、岸田遺跡などの墓地には、石製の玉類や青銅製の武器などが副葬されています。

古墳時代になると老司古墳^{らうじ}や鋤崎古墳^{すきざき}といった前方後円墳で、鏡や武器・武具、工具など豊富な副葬品が見られます。終末期古墳である元岡古墳群 G-6 号墳では、刀身に金象嵌^{きんぞうがん こよみ}で暦を含む文字を刻んだ鉄刀が出土しています。古墳時代の象嵌刀は貴重であるうえに、当時の暦の使用状況が分かる資料として高い価値を有しています。元岡・桑原遺跡群^{もとおか くわばら}や鴻臚館跡^{こうろかんあと}で出土した木簡^{もっかん}は、飛鳥時代から平安時代の様子を文字から知ることのできる資料として重要です。



重要文化財 金錯銘大刀
(元岡古墳群 G-6 号墳出土)

古代の外交施設であった鴻臚館跡からは、建物に使われた瓦類のほかに、中国や朝鮮、イスラム産の陶磁器、西アジア産のガラスなどの対外交流にともなう国際色豊かな出土品が発見されています。

中世になると鴻臚館は廃絶し、交易の拠点は博多に移ります。博多遺跡群の発掘調査

では、中国や東南アジア産の膨大な量の輸入陶磁器類が出土し、これらのほとんどは、京都や奈良、鎌倉などの消費地である他の中世都市に運ばれました。一方、国際貿易により繁栄した博多には、瀬戸や備前などで生産された焼物など、国内各地からも多くの生活物資が運び込まれました。また、職人たちが居住し、金属器やガラス・骨角製品・石製品など様々なものが作られていたことも分かっています。

これらの考古遺物は約130万点を数え、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵され、考古学の調査研究や全国各地の博物館での展示・公開などに広く活用されています。

2) ばしょ（跡地、町並み、自然など）

●古代以前

本市には約1,000箇所の遺跡が確認されており、開発にともなう発掘調査の結果、古くから人々が暮らしてきたことが分かっています。

平野部には大規模な集落遺跡が展開します。弥生時代では板付遺跡、吉武高木遺跡、野方遺跡、比恵遺跡群、那珂遺跡群、有田遺跡群などが知られています。丘陵上にも金隈遺跡といった甕棺墓地が営まれています。また、玄武岩を産出する今山では、弥生時代に磨製石斧が製作された遺跡が発見されています。

古墳時代になると大規模な前方後円墳が造られます。那珂八幡古墳は福岡平野で最古の前方後円墳であり、西区今宿周辺では古墳時代を通じて前方後円墳が造られました。また、老司古墳や鋤崎古墳の埋葬施設は最古級の横穴式石室です。

後期になると市内各地の丘陵沿いに群集墳が築造されます。その中には浦江古墳群1号墳、吉武熊山古墳（吉武古墳群K7号墳）といった、石室に赤色顔料で文様を描いた装飾古墳も含まれます。

古墳時代後期の比恵遺跡群には大規模な倉庫群が作られ『日本書紀』に記述される「那津官家」と考えられています。

飛鳥時代から平安時代には、大宰府が九州の政治の中心となり、博多湾岸で発見されている鴻臚館（筑紫館から鴻臚館に変遷）は、外交の窓口などの役割を担いました。大宰府の関連施設として津厨に比定されている海の中道遺跡、主船司に比定されている周船寺から徳永にかけての遺跡群、大規模な製鉄が行われた元岡・桑原遺跡群などがあります。

また、老司や女原などでは瓦窯が営まれ、大宰府の観世音寺や鴻臚館に供給されていたことが分かっています。大宰府から鴻臚館に至る官道も、発掘調査などによっておおむねその位置が推定されています。

古代末頃、対外交流の場は博多に移り、以後、中世を通じて中国や朝鮮半島をはじめ、東南アジアを含めた貿易が展開されていたことが分かっています。

●中世

鎌倉時代初期には、新興仏教の禅宗が博多湾岸の各地に伝わり、その寺院が展開していきます。博多では聖福寺、承天寺、妙楽寺、中世に西の拠点となった今津には誓願寺、勝福寺、姪浜には興徳寺などが開かれました。

13世紀になると博多湾は元寇（蒙古襲来）という国を揺るがす一大事の舞台となりました。1度目の文永の役の後、沿岸には防護のための石積みが造られます。これらは今日、元寇防塁として知られています。また防塁以外にも蒙古塚や祖原の古戦場など、元寇にまつわる史跡が市内に点在しています。戦国時代には、貿易の利権を求めて戦国大名が勢力を争い、戦乱により博多は荒廃します。これを豊臣秀吉が復興し、その際の土地区画は太閤町割として現在の博多の町並みの基礎となりました。



興徳寺 本堂と庭園

●近世

近世になると黒田氏が筑前国に入国します。最初は名島城に居を構えましたが、城下町が狭小だったこともあり、黒田長政は福岡城を築城しました。城内は天守台、本丸、二の丸、三の丸の4層に分かれ、47の櫓が設置されたといわれています。明治維新後、大半の建物が解体や払い下げにより失われましたが、多聞櫓など一部が今に伝えられています。



国史跡 福岡城跡 下之橋御門と伝潮見櫓

福岡城の築城以後、城下町や宿場の整備といったまちづくりが進められ、寺社の整備や移築も行われました。崇福寺は近世初期に太宰府から現在地（千代）へ移転し、藩主黒田家の菩提寺となりました。また、博多部の中呉服町周辺には善導寺や妙典寺などの寺院が立ち並び、寺町を形成しています。下呉服町周辺には第二次世界大戦の空襲を免れたこともあり、ビルが林立する都心部の中で、町家を含めて独特の景観を呈しています。

都市の周縁部にも、地域の人たちによって守られてきた寺社があります。旧早良郷七ヶ村の郷社であった飯盛神社や、博多湾に浮かぶ能古島に建つ白鬚神社は、建物が市の指定文化財となっている他、各種の伝統行事も伝えられています。

江戸期に整備された街道と宿場は、市内では箱崎、博多、姪浜といった旧唐津街道や、旧三瀬街道沿いの次郎丸にその風情を残しています。これらの地域では戦災を免れた町家建築が残っていましたが、近年の都市化によって、特に旧唐津街道沿いで急速に失われつつあります。その中で、博多の旧三浦家住宅、姪浜の旧山下家住宅は、移築され市

指定文化財となり観光施設として活用されています。また国や市の登録文化財となっている町家も市内に点在しています。

農業関係では、『農業全書』で知られる宮崎安貞みやざきやすただにまつわる旧跡として旧居、墓地の他、開墾事業の名残としての「宮崎開き」みやざきびらの地名が残ります。この他、堅粕かたかすの東光院は平安時代の創建と伝わる真言宗寺院として江戸時代の地誌にも書かれています。幕末の歌人、野村望東尼のむらぼうとうにゆかりの平尾山荘ひらおさんそうとともに、最初の市指定史跡となりました。

名所旧跡では、江戸時代に奥村玉蘭おくむらぎょくらんの『筑前名所図会』ちくぜんめいしょずえに様々な場所が描かれています。その中には寺社の他、穴観音あなかんのん（窟観音）や花乱の滝からん たき（花瀾の瀧）など現代にその姿が受け継がれているものもあります。また黒田家の別邸であった友泉亭ゆうせんていは公園として整備されています。重留しげどめの妙福寺庭園みょうふくじていえんは江戸時代の庭園の姿を残すものとして貴重です。

●近代

近代になると、市街地は中世以前の対外交流の拠点としての地勢に加え、近世の黒田氏による都市基盤整備を継承する形で発展します。

交通の拠点として、まず整備されたのが博多港です。明治16（1883）年に特別貿易港に指定され、長崎税関出張所が設置されました。昭和初期には大規模な修築工事が行われ、昭和14（1939）年には第1種重要港湾に指定されました。鉄道では明治22（1889）年に博多駅が開業しました。その後、2度ほど場所を変え、現在も鉄道における九州の結節点として重要な役割を果たしています。明治43（1910）年には路面電車が開通しました。戦後の高度経済成長期以後、自家用車の普及などにより、利用人口が減少し、昭和54（1979）年に廃止されました。福岡で最初の本格的な飛行場は、昭和5（1930）年に名島に作られた水上飛行場です。リンドバーグ夫妻が世界一周の旅の途中で訪れたことで知られています。昭和11（1936）年には雁ノ巣がんのす飛行場が開港、東京、大阪から朝鮮半島、中国への中継地としての役割を担いました。昭和19（1944）年には陸軍によって席田飛行場が作られました。戦後は米軍に接收され板付基地として運営、昭和26（1951）年に民間航空の路線が開設され、昭和47（1972）年に福岡空港となりました。

都市の発展の過程においては、博覧会等の開催が大きな役割を果たしました。明治43（1910）年の第13回九州沖縄八県連合共進会では、福岡城ひぜんぼりの肥前堀が埋め立てられました。跡地は現在、大名地区としてにぎわっています。この博覧会で来賓接待所として西中洲の一角に建てられた建物は、現在、公会堂貴賓館として公開されています。また昭和2（1927）年の東亜勸業博覧会とうあかんぎょうはくらんかいでは、福岡城おおほりの大堀が整備され、会場となりました。現在は大濠公園として市民の憩いの場となっています。

農業関係では、明治期に福岡農法を開発・普及した林遠里はやしえんりの生家跡や墓地が、子孫によって守られています。脇山には、昭和天皇即位の大嘗祭だいじょうまいに献上する米を作る水田として選ばれた主基齋田すきさいでんの跡が残ります。現在は脇山中央公園となっていますが、周辺の水田では、その事績を伝えるお田植え祭りが行われています。

●自然

歴史的には、海の中道や箱崎の松原、生の松原が多くの古歌や絵画に登場し、対外交流の舞台としての景観イメージが再生産されていきました。鎌倉時代、聖福寺第16世・鉄庵道生てつあんどうしょうが博多湾岸の名所を詠んだ詩文「博多八景」では、香椎の雪景、箱崎の市場、博多長橋しゅんちやうの春潮、博多庄浜しやうはま（那珂川河口の浜辺）から見える陰暦4月の月、志賀島の独釣どくちやう、浦山の秋晩いさき、一崎の松林の中の小径、能古島へ帰る帆船というように、四季の移ろいの中での人びとの営みが巧みに表現され、当時の自然環境を知る手がかりを提供してくれます。

この他、神功皇后伝説じんぐうこうごうとも関わりの深い宮崎宮の宮松や香椎宮の綾杉、生の松原の逆松さかまつなど、歴史上の物語と結びついた樹木があります。なお、指定文化財となったものとしては、地質・鉱物である長垂の含紅雲母ペグマタイト岩脈、名島の檣石、動植物では櫛田の銀杏、金武のヤマモモなどの巨木や、橋本八幡宮のイヌマキ群落等があります。

3) いとなみ（伝統行事、伝統技術、食文化など）

●伝統行事など

国の重要無形民俗文化財であり、ユネスコ無形文化遺産にも登録された博多祇園山笠行事はかたまつばやしや博多松囃子に由来する博多どんたく港まつりなどは、全国的にも広く知られ、地域ににぎわいと活気を与えています。また、宮崎宮の放生会や玉せせり、十日恵比須神社とおかえびすの十日恵比須なども、季節の移り変わりを告げる行事として多くの市民が訪れます。この他にも、季節ごとに地域の伝統的な祭礼が行われています。

正月から春にかけての年中行事として、石釜のトビトビや金隈かねのくまの鳶とびの水が、正月の来訪神行事として知られています。玉せせりは姪浜いざきや伊崎でも行われています。今宿上町天満宮いまじゆくうえまちてんまんぐうの鬼すべ行事は、江戸時代に太宰府の鬼すべのうつしとして始まりました。西区の漁村、唐泊地区（宮浦）では、その年の年男、年女が飾りを施した笹をもち、集落を巡りながら所々ごまんざいで御万歳が舞われます。その節回しや手一本の形式は、上方（大阪）との関連が想起されます。廻船の拠点であった唐泊地区の地域性を示すものかもしれません。志賀海神社には青年男子が弓矢ほしやさいでの的を射る歩射祭や、海や山の豊穰よしゆくを予祝する山ほめ祭が伝わっています。飯盛神社などのかゆ占いは、かゆに生えたかびの状態から、その年の農作の豊凶を占う行事です。

夏には、疫病除けの行事である祇園行事ぎおんぎやうじや獅子祓ししばらいがあります。祇園山笠は博多が有名ですが、西戸崎、唐の原、今宿、小呂島など各地に博多の様式が伝わっています（ハカタウツシ）。獅子祓ししばらいは、地域、集落単位で行われ、地域の大人と子どもたちが獅子頭ししがしらをもって家々を回り、無病息災むびやうそくさいを祈ります。草場、西浦、田隈には、伝統的な盆行事として、盆綱引きや盆押しぼんおと呼ばれる行事が伝わります。また志賀島、城の原には、地域独自の節回しを持つ盆踊りが伝わっています。箱崎には地藏盆の人形飾りじやうはるが、また大博町の旧大浜地区たいはくちやうでは流灌頂ながれかんじやうと呼ばれる施餓鬼供養せがきくやうの行事が伝わります。地区には今

も行事で使われている大きな灯籠絵が伝わっています。

秋の年中行事として、能古島の白鬚神社のおくんち行事は宮座などに伝統的な型式をよく残しています。中でもモリモンと呼ばれる神饌は豪華で目を引きま

す。この他、飯盛神社では流鏝馬が行われ、筥崎宮と志賀海神社では、隔年の御神幸が行われています。奈多に伝わるはやま行事は、若者が塩鯛を調理する所作の速さを競い合います。かつては翌年の漁場の優先権をかけて行われていました。漁村の生活を表す珍しい行事です。

他にも、田島神楽や今津人形芝居といった民俗芸能は、地域の人々の心の拠り所として、今に受け継がれています。

音楽、芸能などの分野では、一朝軒伝法竹という尺八、筑前琵琶、その原型とされる盲僧琵琶などが伝わります。また独楽による曲芸を披露する筑前博多独楽や、博多弁の言葉遊びによる即興笑劇博多仁和加は、人々を楽しませています。この他、福岡藩に伝承した武技である砲術や柔術もあります。

●伝統技術

博多部には博多織、博多人形、博多張子、博多独楽などの伝統工芸の技術がのこされています。また博多曲物は筥崎宮の儀式で用いられる道具を作る技術が発展、継承されたものと考えられています。



博多織

●食文化

玄界灘に面し、山地に囲まれた本市は、昔から海の幸や山の幸が豊富にとれる場所でした。それらの食材は、海を通じた交流の歴史の中で様々なかたちで楽しまれ、豊かな食文化を築いてきました。

ごまさばやおきゅうと、あぶってかもは、新鮮な海産物を活かした食べ物です。明治時代以降に生まれた辛子明太子、もつ鍋、水炊き、とんこつラーメンなども現在では福岡名物の食として全国的に広く親しまれています。また、室見川のシロウオ漁は春を告げる風物詩となっています。また禅宗の伝来とともに喫茶や粉食文化が博多に持ち込まれますが、その中でもうどんは独自の形で受け継がれています。料理以外では、醤油や日本酒といった伝統的な醸造技術を受け継ぐ会社も残っています。このほか、夜の繁華街に営まれる屋台は、市民はもちろん、観光客にも人気のスポットであり、本市を代表する風景の一つでもあります。



うどん

● 2000年間多様な文化と交わりながら進化してきた都市発展の歴史文化

本市は、金印を授けられた奴国や伊都国の繁栄、古代の外交施設である鴻臚館、中世に国際貿易都市として栄えた博多、江戸時代の福岡城下町、明治時代以降の福岡市と、各時代の社会的・歴史的状況を背景として、性格が異なる都市が重層的に形成されてきました。人々をひきつける交流・定住に適した地勢を基盤に、大陸や朝鮮半島に対する日本のゲートウェイ¹として、また、大陸・半島と日本各地を繋ぐ結節点として、多様な文化の交わりを背景に、2000年にわたる都市としての発展のストーリーがあります。

● 2000年にわたる都市集積を示す豊富な文化財

本市は、多様な文化との交流の拠点であった博多湾を中心に、海や陸を通じた各地との繋がりのなかで発展し、外に対するまもりを固めながら、都市と周縁地域との支え合いの中で豊かな歴史文化を形成し、現在の福岡市へと発展を続けてきました。

市内には、中世以前の大陸や朝鮮半島との交流の歴史を今に伝える文化財、現代に継承される都市基盤が整えられた近世の歴史や文化を物語る文化財、そして近代に入りアジアとの交流を背景に目覚ましい都市発展を遂げてきた現在と関係が深い文化財など、本市ならではの歴史を物語る文化財が豊富に残されています。

以上のことから、地理的な特徴を背景に、海を通じた交流拠点であり続けたことが、2000年にわたって都市として発展を続けてきた独特の歴史文化を育み、さらに歴史を伝える文化財が豊富に残っていることが、福岡市の歴史文化の特徴であるとまとめることができます。序章において述べたように、このような都市としての歩みは、160万人以上の人口を擁する九州一の商業・流通都市として発展し続ける現在にもつながっています。

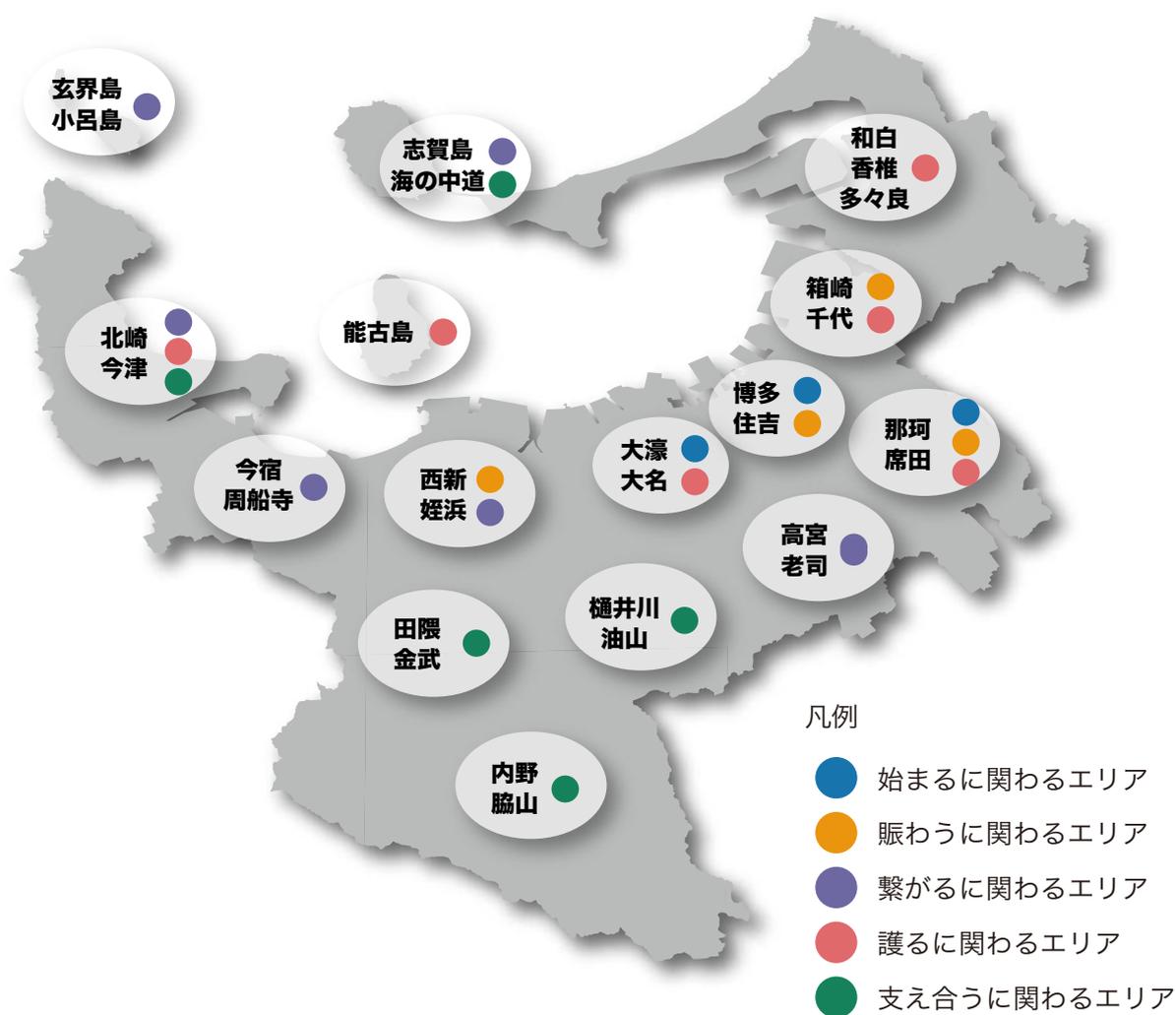
上記の歴史文化の特徴は、地勢、都市としての発展、それを証する文化財という3つの観点からみた場合に浮かび上がってくるものです。歴史文化を捉える多角的な視点を重んじながら、今後も調査研究を進めることにより、本市の歴史文化の特徴を追及していく必要があります。

¹ゲートウェイ：玄関口、入り口。

(2) 本市ならではの歴史文化を物語るストーリーとエリア

「歴史文化基本構想」では、本市の歴史文化の特徴を「海を通じた交流を軸にアジアの拠点として発展を遂げた2000年を超える歴史文化の重層性」にあるとまとめました。これをより多くの人々に知ってもらうため、「始まる」・「賑わう」・「繋がる」・「護る」・「支え合う」の5つ視点で分かりやすくまとめた物語を「メインストーリー」として整理しました。あわせて、メインストーリーを体感する面的な広がりとして、歴史文化の視点により市内全域を15の「歴史文化エリア」に区分しました。

以下にメインストーリーおよび、関わりが深い歴史文化エリアを紹介します。



ストーリーと関わりが深い歴史文化エリア

始まる 『福岡・博多の「はじめて」ものがたり』

古くから海を介して大陸や半島と交流してきた結果、最先端の文化が続々とこの地にやってきました。日本の食文化の基盤である米作り、中世の禅宗や喫茶、粉食の文化など、福岡・博多に伝わったこれらの「日本初」は、本市の文化を形成する原点となりました。

賑わう 『福岡・博多 2000 年のまちのにぎわい』

博多湾を臨む本市には、古くから多様な目的や背景をもった人々が集まり、活発な経済活動が行われてきました。およそ 2000 年前の「奴国」以降、中世の国際貿易都市「博多」、江戸時代の城下町「福岡」を経て現在に至るまで、都市であり続けた福岡・博多には様々な都市文化が育まれました。

繋がる 『ヒト・モノ・情報をつなぐ海・陸・空の結節点』

大陸と日本をつなぐ外交・交易の拠点であった鴻臚館、江戸時代の流通ネットワークを担った街道と廻船など、本市は各時代を通じてヒトとモノ、情報をつなぐ結節点として機能しました。現在でも海・陸・空路の交通網は、本市と国内外を有機的に結合させ、都市のさらなる発展を支えています。

護る 『国際交流都市のまもりと平和への祈り』

本市は、国際交流都市である反面、各時代において国家間の緊張が高まると、まもりの最前線となりました。防人の設置、元軍の遠征と石築地の築造、戦国時代の戦乱、福岡大空襲などの数々の悲しい出来事を物語る文化財が市内各所に残されており、争いの恐ろしさと平和の尊さを伝えています。

支え合う 『都市と村々の暮らしと信仰』

都市周縁部の農村、漁村、山村では、様々な生業を持つ人々の生活と信仰が積み重ねられてきました。生活の中の人々の願いや祈りは様々な民俗として地域に定着しました。都市と周縁の村々は互いに支え合いながら、一つの文化圏を形成してきたといえます。

各メインストーリーの詳細は「歴史文化基本構想」に記載しています。

<p>志賀島・海の中道</p> <p>博多湾の玄関口にある志賀島と、国内でも珍しい砂州・海の中道があるこのエリアは、金印「漢委奴国王」発見の地として知られ、古代の海人・阿曇氏が祖神とあおいだ海神をまつる志賀海神社、元寇の激戦を物語る蒙古塚などの文化財があります。また、『万葉集』にも詠われた漁撈や塩づくりの痕跡が海の中道遺跡で見つかるなど、海とともに生きた人びとの文化や大陸との交流の歴史が残されています。</p>	<p>和白・香椎・多々良</p> <p>『万葉集』にも詠われた景勝地・香椎瀨があったこのエリアは、香椎宮が鎮座し、神功皇后の半島進出に関連する伝承が多く残されています。戦国時代には、筑前国を与えられた小早川氏が名島城を築城、関ヶ原の戦い後には筑前国に入った黒田氏によって香椎宮が再建されました。戦前には、名島に水上飛行場、雁の巣に飛行場が置かれ、日本の空路を支えました。</p>	<p>箱崎・千代</p> <p>宮崎宮が鎮座するこのエリアは、門前町として、また博多に次ぐ貿易の拠点として賑わってきました。江戸時代には唐津街道の宿場町としてにぎわい、参勤交代の中継地として御茶屋が設置されました。街道沿いには、商家が立ち並び、千代町にはかつて太宰府にあった崇福寺が移転し、福岡藩主・黒田家の菩提寺となりました。近代には九州帝国大学が誘致され、福岡市の近代化の礎となりました。</p>
<p>博多・住吉</p> <p>古代から交易の拠点として発展してきたこのエリアは、中世貿易都市・博多の名残や太閤秀吉の町割、近世の町家、近代以降の都市の発展を重層的に感じることができます。住吉神社や櫛田神社といった由緒ある神社や、聖福寺や承天寺に代表される寺町が景観を形成し、博多祇園山笠や博多松囃子など本市を代表する祭礼が町に賑わいと活気を与えています。</p>	<p>那珂・席田</p> <p>博多から大宰府に向かう道筋にあり、弥生時代以来、低地を利用した水田が広がっていたこのエリアは、古代の条里制の名残を残す水田区画が昭和初期頃まで残されています。弥生時代の古い時期の農村が確認された板付遺跡や雀居遺跡、弥生時代の共同墓地である金隈遺跡などを通じて、弥生文化に触れることができます。</p>	<p>大濠・大名</p> <p>古代には鴻臚館、江戸時代には福岡城が存在したこのエリアは、海・陸の交通の要衝として発展しました。菅原道真ゆかりの水鏡天満宮に由来する「天神」の街は、現在、九州一の繁華街となっていますが、舞鶴・大濠公園に残された鴻臚館・福岡城の痕跡、街中にたたずむ近代建築、古い町割などから、往時のにぎわいに想いを馳せることができます</p>
<p>高宮・老司</p> <p>鴻臚館から大宰府へ向かう官道の推定ルートがあるこのエリアは、古代から近代に至るまでの多彩な文化財が存在する地域です。初期横穴式石室に豊富な副葬品が納められた老司古墳や、大宰府観世音寺とも関係の深い三宅廃寺跡や老司瓦窯跡、近代に炭鉱で財を成した貝島家の旧邸宅などを通じて、本市の悠久の歴史を感じることができます。</p>	<p>樋井川・油山</p> <p>大規模な寺域を誇った東油山泉福寺（現在の正覚寺）がある油山の麓に広がるこのエリアは、樋井川兩岸の丘陵を中心に集落が営まれ続けてきました。山岳仏教が盛行し現在は市民の憩いの森として親しまれる油山、福岡藩主の別邸として作られた友泉亭庭園、田島神楽が奉納される田島八幡神社など、豊かな自然と歴史に触れることができます。</p>	<p>西新・姪浜</p> <p>福岡平野と糸島平野をつなぐ海岸沿いに位置するこのエリアは、室見川沿いの微高地や、海岸の砂丘上を中心に、古い時代から人々の活発な活動が確認できます。弥生・古墳時代の交易拠点であった西新町遺跡や、古代早良郡の中心であった有田遺跡、元寇の記憶を今に伝える麓原山や元寇防塁、唐津街道の宿場町としても栄えた港町・姪浜など、交通の結節点であった歴史を今に伝ええています。</p>
<p>田隈・金武</p> <p>油山と叶岳に挟まれ、室見川の恵みに育まれた肥沃な土地を持つこのエリアは、河川兩岸の微高地や丘陵を中心に集落が展開してきました。弥生時代の拠点集落であった吉武高木遺跡や野方遺跡、丘陵斜面に営まれた大規模な古墳群、中世に大きな宗教的勢力を誇った西油山天福寺や飯盛神社、肥前と結ぶ三瀬街道沿いの町並みなど、連綿と続いてきた人々の営みを知ることができます。</p>	<p>内野・脇山</p> <p>脊振山の豊かな自然に包まれたこのエリアは、中世の山岳信仰の隆盛とともに栄えた脊振山東門寺の寺領で、戦国時代には荒平城や池田城が築かれ、筑前と肥前の国境に位置する交通の要衝でした。山間部の水田開発には熊野比丘尼の伝承も残され、昭和天皇の即位時には大嘗祭に用いる新穀を穫るための主基斎田に選ばれるなど、山村と農村の様相を併せ持っています。</p>	<p>今宿・周船寺</p> <p>糸島半島の付け根に位置するこのエリアは、古代山城である怡土城が築かれた高祖山を背後に、尾根筋や海岸砂丘を中心に集落が営まれてきました。弥生時代に玄武岩で石斧生産を行った今山遺跡や伊都国の交易拠点であった今宿五郎江遺跡、前方後円墳13基が築造された今宿古墳群、江戸時代の農学者・宮崎安貞ゆかりの史跡など、自然と共生した人々の暮らしを知ることができます。</p>
<p>北崎・今津</p> <p>糸島半島の東半、博多湾の西端に位置するこのエリアは、福岡・博多と大陸・朝鮮半島を結ぶ交通の要衝として重要視されてきました。「庚寅銘大刀」が出土した元岡G6号墳や、遣唐使の寄港地であった韓亭（唐泊）、中世に港町として栄えた今津と寺院、海岸沿いに築造された元寇防塁など、海上交通に関わる史跡や習俗・信仰が良好に残されています。</p>	<p>能古島</p> <p>博多湾に浮かぶ能古島は、江戸時代に五ヶ浦廻船の根拠地の一つとして栄えました。一方で、古代の防人の設置、中世の外敵の侵入、江戸時代の台場の築造など博多湾のまもりを大きく左右してきた島でもあります。また、古代は馬牧として、江戸時代には鹿狩りの場として利用されるなど、豊かな自然にも恵まれています。</p>	<p>玄界島・小呂島</p> <p>志賀島と糸島半島の間に浮かぶ玄界島は、百合若伝説を伝える小鷹神社があり、近世には藩の遠見番所が置かれるなど、博多湾の玄関口に位置する離島です。一方、玄界灘に浮かぶ小呂島は、中世には海上交通の要衝として、戦時中には陸海軍の要塞として重要な役割を果たしました。現在はハカタウツシの山笠行事も執り行われています。</p>